



2016年度 国際社会実習報告書

ラオス・フィリピン・香港・カナダ



**2016年度
国際社会実習報告書**

国際社会実習報告書

2016 年度

【Contents】

発刊に あたって		01
実習報告1	スタディツアー:ラオス 「ラオスの歴史と文化に触れる旅」に ついて	02
実習報告2	スタディツアー:フィリピン フィリピン（ルソン島ビコール地方）に おける実施報告	18
実習報告3	スタディツアー:香港 ローンボウルズとグローバル・ヒストリー	49
実習報告4	外国語実習:カナダ English for Academic Purposes (EAP) at UNB Saint John College	56

発刊にあたって

本書は、高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース／人文学部国際社会コミュニケーション学科で2016年度に開講された「国際社会実習」の実施報告である。本コース／本学科では、海外実習科目を、《①スタディ・ツアー、②外国語実習、③国内調査実習、④海外調査実習、⑤フィールド・リサーチ》という5つの科目群へと段階的に整理し、学生のニーズやレベルに応じて国際実習の充実・体系化を図っている。2016年度は、ラオス、フィリピン、香港における「国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ」が実施され、カナダでは「国際社会実習（外国語実習）Ⅰ」が実施された。各実習へは、複数のコース／学科をまたいで学生たちは参加している。

本書に掲載された海外実習報告では、いずれも教員による活動概要・成果の総括と、参加学生による体験レポートが収められている。特に、学生自身によるレポートに注目すると、アジア三か国におけるスタディ・ツアーの参加者たちは、現地でしか体感できない経験からうみだされた現地の都市空間、経済発展、観光化などに関する考察や、現地カウンターパートナーとの異文化交流について紹介している。カナダでの外国語実習を体験した学生たちは、単なる英語学習に留まらず、グローバル社会における“生きた英語”を体感し、ホームステイを通じたカナダの日常への深い理解などがレポートにまとめられている。詳細は本論に譲るが、いずれのレポートも、現地に飛び込むことでしか得られない「越境する学び」の一端を読み取ることができる。海外での実習に関心のある学生・教員の方々には、本書をぜひ手にとっていただき、大小にかかわらずコメントをお寄せいただけると幸いである。

最後になったが、今回の実習の企画・実施に際しては、多くの関係者の方々より多大なるご支援・ご協力をいただいた。この場を借りて、御礼申上げたい。併せて、本報告書は人文社会科学部長裁量経費からの補助を受けて発行されたものであり、ここに感謝の意を記したい。

2017年7月4日

高知大学
人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース長
人文学部国際社会コミュニケーション学科長

遠山茂樹

スタディツアー「ラオスの歴史と文化に触れる旅」について

高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース

岩佐 光広

はじめに

以下では、高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース（旧人文学部国際社会コミュニケーション学科）の専門科目「国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ」として、2016年度2学期にラオス人民民主共和国（以下ラオスと省略）において実施したスタディツアーの概要について説明する。まずⅠでは、本スタディツアーのねらいについて説明し、Ⅱではラオスにおいて実施した活動内容について概説し、最後に今後の課題について簡単に述べたい。

Ⅰ 本スタディツアーのねらい

ラオスは、国土面積は約24万平方キロメートル、人口が約660万人の社会主義国である。東南アジア大陸部のほぼ中央に位置するラオスは、四方をタイ、ミャンマー、中国、ベトナム、カンボジアと接する内陸国である。またラオスは、多様な民族集団が暮らす多民族国家でもある。このラオスにおいて、2017年2月18日から28日にかけての10日間の日程でスタディツアーを実施した。

その目的は、大枠としては、2013年度にタイで実施したスタディツアーと同様のものである。すなわち、(1) 実際に現場に足を運び、たとえ限られた経験だとしても「異文化」に触れ、単純化・均質化しきれない現実というものを部分的にであれ実感してみる経験を学生に提供すること、そして(2) その経験を出発点として問いを立て、先行研究や資料を参照しながら改めて整理し直し、レポートとしてまとめるという作業を通じて、スタディツアーの経験を「大学での学び」と接続していくこと、である〔岩佐 2014〕。今回のスタディツアーでも、参加学生には、ラオスを実際に訪問し滞在する過程で、自分が興味をもつこと、疑問に思うことを発見し、それをレポートとしてまとめるという課題を課した。

その課題に取り組むための視点として、今回は「歴史」と「文化」という2つの面に焦点を当てた。サブタイトルを「ラオスの歴史と文化に触れる旅」として、歴史と文化という切り口からラオスについて触れ、学び、考えてもらうことをねらいとしながら計画を立てた。

まず歴史の面では、特にラオスの近現代史と「戦争」の関係に注目をした。19世紀末からフランス領インドシナ連邦としてフランスの植民地下に置かれていたラオスは、1950年代中頃に独立が認められることになったものの、今度は、各国で右派勢力と左派勢力のあいだでの政権をめぐる「内戦」が勃発した。その戦いは、当時の東西冷戦構造の影響、特にこの地域の共産主義化を懸念するアメリカの介入によって激化し、各国の情勢は悪化の一途を辿った。この時期、1960年代から1970年代にかけての10年間、アメリカはラオスに対して激しい空爆を行っている。この10年間でアメリカは200万トン以上の爆弾をラオスに投下しており、そ

れは当時のラオスの住民1人あたり2万トン以上に及ぶものである〔スチュアート＝フォックス 2010：221〕。そして、そのときに投下された爆弾は、現在でも不発弾としてラオスの地に残っており、今もそれが原因で死傷する人が後を絶たない。

しかしながら、「ラオスにおける戦争が実際どの程度拡大していたのかは、アメリカが故意にごまかしていたことによってほとんど外には知らされなかった」〔スチュアート＝フォックス 2010：209〕のものであった。このラオスにおける「秘密爆撃」については、近年になり明らかにされつつあるものの（たとえば竹内〔2004〕などを参照）、その事実を知る人は現在においても多くはないだろう。スタディツアーでは、その歴史を事前に学びつつ、実際に爆撃を経験した地域を訪れることで、それが現在にどのような傷跡を残しているのかについて知り、そしてそれを通じて「戦争」と言うものについて改めて考える機会を提供できればと考えた。

次に文化の面では、特にラオス国内の地域的な多様性に注目した。石井米雄〔2003〕は、ラオスは水平的にも垂直的にも3つの世界に分かれていると述べている。水平的にみたときラオスは、地域ごとに別の政治権力の支配下にあった歴史を負っているために、ルアンパバーンを中心とする北部、ヴィエンチャンを中心とする中部、チャムパーサクを中心とする南部の3つの地域に大別することができる〔石井 2003：28〕。一方、ラオスの山がちな国土に暮らす人びとの分布は、居住環境に応じて垂直的に大別することもできる。すなわち、低地平野部で水稲耕作を営むタイ系諸語族を中心とするラオ・ルム（低地民）、山麓部で焼畑移動耕作に従事するモン・クメール系諸語族を主とするラオ・トゥン（山腹民）、高冷地で常畑耕作を行うチベット・ビルマ語系諸族を主とするラオ・スーン（山頂民）の3者に大きく分けられ、それぞれがそれぞれの生活世界を形成している〔林 2003：211〕。くわえて、近年の市場経済化やグローバル化、ラオス政府による各種の政策や社会開発の影響のもとで、国内外でのヒトやモノの移動が活発化したり、地域間の経済格差、都市部と農村部のあいだでの経済発展のスピードの違いが顕著になってきたりもしている〔Rigg 2005；Rehbein 2007〕。

このように、一言にラオスといっても、そのなかには地域的な多様性があり、生活や文化の面での地域差や変化もみることができる。そこで今回のスタディツアーでも、複数の地域を訪れ、それらの地域のあいだの相違点や相同点について学び、考えてもらう機会を提供することも必要と考えた。

以上をふまえ今回は、首都ヴィエンチャン特別市とシェンクアン県の2箇所を訪問先とした。ヴィエンチャン特別市は、ラオス中部のメコン川沿いに位置するラオスの首都であり、国内最大の都市である。特に2010年にラオス証券取引所が設立されて以降、ヴィエンチャンには多くの海外企業が進出するようになり、急速に開発が進んでいる地域となっている。一方、シェンクアン県は、ラオスの北東部に位置し、ベトナムと国境を接する山地部である。古代から近現代に至るラオスの歴史にくり返し登場する場所であり、なにより上述した秘密爆撃の対象となった地域でもある。これらの性格を異にする地域を訪れ、それぞれの場所で歴史と文化に触れることを通じて、ラオスをより立体的・多角的に理解する機会を提供できると考えた。

II スタディツアーでの活動

上記の企画のもとで、スタディツアー開催の告知と説明会を行い、参加者を募った結果、国際社会コミュニケーション学科の2回生（当時）の堅田朱音さんが参加することになった。また、今回はサポートとして同僚の中西三紀先生も同行してくれることになり、計3名での実施となった。スタディツアーに出発するまでは、週に1回ほどのペースで事前学習会を実施し、ラオスの歴史や民族についての文献を読んだり、基礎的なラオス語の学習を行ったりした。また、スタディツアーの具体的なスケジュールリングについても、3名で相談しながら決定していった。

以上の事前準備を経て、2017年2月の約10日間、ラオスにおいてスタディツアーは実施した。2月18日から23日までは首都ヴィエンチャンに滞在した。ヴィエンチャンでは、中心部のホテルに宿泊し、そこを拠点として滞在した。まず、ヴィエンチャンという街を知るために、ワット・シーサケートなどの仏教寺院、国立博物館、老舗のラオス料理レストラン、ラオス最大級の市場であるタラート・サオ、メコン川沿いのナイトマーケットなどを中心に散策を行った。また5日目には、日本語で通訳してくれるラオス人ガイドを雇い、ラオス国立大学を訪問した。そこでは、大学に併設されているラオス日本センターや、文学部に所属する日本語学科を見学し、職員の方や学科長などに話を伺うこともできた。他にも、ラオスで英語教育に従事する関係者や、大使館職員、JICA 職員などと会食する機会も設けた。

続く23日午後から28日まではシェンクアンに滞在した。シェンクアンでは、英語通訳のラオス人ガイドを雇いツアーを行った。そのツアーでは、巨大な石壺が無数に転がる遺跡群のあるジャール平原を中心に、爆撃によって破壊された傷跡の残る仏教寺院、クラスター爆弾の母艦から採れるアルミニウムを使って土産物を作る村、不発弾処理を行う NGO など、戦争に関連する場所や施設を訪れた。また、タイ系民族の集落、集落で運営しているミュージアム、山地民が中心に集まる定期市、フェアトレードを理念とする絹織物工場など、山地部の生活や文化に触れることのできる場所や施設も訪問した。その期間中に、偶然、青年海外協力隊としてシェンクアンで活動を行う大学院生と出会うことができ、その活動についての話を聞くこともできた。

おわりに

最後に、今回のスタディツアーを実施しての今後の課題について触れておきたい。課題としては、参加学生が1名であったという点につきる。参加者が少なかった理由の一つとしては、費用面の高さが挙げられる。ラオスの場合、滞在費はそれほどかからないものの、日本からの直行便がなく、直行便のある他の東南アジア諸国と比べると、どうしても移動費がかかってしまう。また、渡航・滞在の安全性を確保しようとする、移動手段や滞在場所の選択において安くすまそうとすることにも限界がある。スタディツアーの内容と安全性の質を維持しながらも、参加費用を抑える方策を考えることが課題となるだろう。

そうした課題はあるものの、今回のスタディツアーに参加してくれた堅田さんの現地でアク

ティヴに活動する姿、そして帰国後のレポート執筆を含めた学ぶ姿勢をみることで、こうした活動がもつ「大学における学び」における意義を改めて確認することができた。「入門編」と位置づけられているスタディツアーを通じて得られた学生たちの学びをより高めていくためには、「海外調査実習」というより専門性の高い実習も開講していくことも求められよう。今回のスタディツアーを踏まえつつ、継続性のある新たな企画を計画することも今後の課題である。

謝辞

本スタディツアーに関わる諸経費は、高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース共通経費による。事務的な面では、国際社会コース留学・実習委員会、人文社会学部事務室、国際社会コース事務室をはじめとする教職員の皆さんにサポートしていただいた。そしてなにより、サポートとして参加いただいた中西三紀先生、教員2人と学生1人という難しい状況でも主体的に活動してくれた堅田朱音さんの頑張りがあっての本スタディツアーであった。みなさんに記して謝意を申し上げたい。

参考文献

- 石井米雄 2003 「ラオスの魅力と学び方」『ラオス概説』、ラオス文化研究所（編）、pp.21-29、めこん。
- 岩佐光広 2014 「タイ・ビルマ国境行きスタディツアーについて」『2013年度国際実習報告書』、高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科（編）、pp.21-25。
- スチュアート＝フォックス、マーチン 2010 『ラオス史』、菊池陽子訳、めこん。
- 竹内正右 2004 『ラオスは戦場だった』、めこん。
- 林行夫 2003 「宗教」『ラオス概説』、ラオス文化研究所（編）、pp.207-240、めこん。

Rehbein, Boike. 2007. *Globalization, Culture and Society in Laos*. Routledge.

Rigg, Jonathan. 2005. *Living with Transition in Laos: Market Integration in Southeast Asia*. Routledge.



ラオス国立大学訪問と国際社会実習の新たな展開の可能性について

高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース

中西 三紀

はじめに

ラオスにて実施した2016年度「国際社会実習（スタディツアー）Ⅰ」では、実習の一環としてラオス国立大学を訪問した。目的は、第一に、ラオスの大学事情を学生にまず肌で感じてもらうこと、第二に、文学部日本語学科と同大学内に開設されているラオス日本センターを視察することであった。日本人が漠然と抱く「途上国の大学」というイメージを覆すキャンパスは学生にも考えさせることがあったようであり、また、視察も教職員から懇切丁寧な説明をきくことができ、当初の目的を十分に達成することができた。加えて、私たちの訪問がお昼休みと重なったこともあり、本実習参加学生が昼食を買いに行く学生と一緒に大学内のコンビニエンスストア（的なもの）でともに買い物を楽しみ、片言の日本語ながらも情報を交換するなど、想定していなかったうれしいハプニングもおこり、とても有意義なものとなった。

一方で、教員にとってラオス国立大学訪問は、今後の国際社会実習の新たな展開方向を考えさせるものであった。以下では、この点について触れておきたい。

I 視察内容の概略

ラオス国立大学は、車で30分ほどと、ヴィエンチャンの中心部から少し離れたところにあり、またその所在地の名前をとってドンドクとも呼ばれる。訪問したのは実習5日目、2月22日のことで、当日は乾期のラオスの春らしく、青空が広がる、暑い日であった。ブーゲンビリアが咲き誇り、学内に牛が放牧されている、のどかなキャンパスではあるが、半面、ラオスの経済成長を反映して大学周辺の開発も進んでいるようで、大学から一歩外に出ると車、バイクが慌ただしく行き交う様子も見られた。

ラオス国立大学は1996年にラオスで唯一の総合大学として設立された。2000年には人文社会科学学部が社会学部と文学部に分かれ、現在は文学部の一学科として日本語学科がある〔国際交流基金 2006〕。当日は学科長 Mixay Soukchaleun 先生と、国際交流基金から派遣されている日本語教育アドバイザーの船本日佳里氏から話を聞くことができた。それによれば、先に指摘した近年のラオスの経済開発に伴い日本企業も数多くラオスに進出しているため、日本語の需要も堅調であり、常に一定数の学生が日本語学科を志望するという。また、在籍学生数は1学年40名ほどであるが、多くの学生が卒業を待たずに就職先を決めて大学を後にするとも言っていた。日本語を学ぶ目的が就職に直結しているという印象であった。また、日本語学科ではかなり積極的に日本の大学と協定を結んでおり、当日も午後から東京外国語大学ラオス語コースの学生の訪問を控えているとのことであった。

いま一つ、ラオス国立大学には日本の国際協力機構の支援のもと「ラオス日本センター」も

開設されている。開設されたのは2000年であり〔国際協力機構〕、こちらは日本および日本語に興味があるすべての学生を対象に日本語を教え、日本の文化を伝える催しものや弁論大会などを開催しているという。2月末の訪問であったため、センターの入り口正面には見事な雛飾りが見られた。残念ながら当日は授業がなく、また教員も大学に出てきていないとのことで事務職員にしか会えなかったが、センター内の設備、使用している教科書などを見ることができた。

Ⅱ 日本語を利用した実習の可能性について

22日は午後からヴィエンチャン市内に戻り、タートルアンをはじめとする名所を回る予定でもあったため、日本語ができるガイドを雇っていた。国際社会実習の新たな展開方向の着想を得たのは、実にそのガイドさんとの雑談においてであった。彼女は、ラオス国立大学経済学部を卒業し日系企業に勤めたのちに日本語ガイドとなった経歴を持つ。在学中はラオス日本センターで開講される授業にも参加した経験がある。その場での詳しい言葉のやり取りはここでは割愛するが、要約すれば、本学からの国際社会実習参加学生と日本語学科をはじめとするラオス国立大学生との交流の場を広げることができれば素晴らしいではないか、より具体的には、コミュニケーションツールを日本語に設定し、ラオス国立大学生は日本語での会話の実践機会を、国際社会実習参加学生は同年代の者の目を通じて見えてくるラオスの実情を知る機会が得られるではないか、win-winの関係が築けるではないか、という内容であった。

国際的コミュニケーションツールとしての英語の重要性は万人が指摘するところであり、本学でも、外国に出たからこそ英語でのコミュニケーション能力の必要性が実感できたという話によく聞く。学生にとっては「身をもって知る重要な気付き」であると思う。本実習でもそれを一つの目的に、後半のシェンクアンでのツアーには英語のガイドを雇った。ただし、必ずしもすべてを英語にこだわる必要はないのかもしれない。日本語ができるラオス人ガイドさんと語り合った相互交流であれば、日本語をコミュニケーションツールに設定するからこそ、同年代の者から見えるラオスの実情を知ることができ、訊きたいことも訊けるだろう。教員との会話がどうしても「知識の伝授」といった側面に偏り、また学生自身もそれを受容するという立場から大きく逸脱できない傾向にあるとすれば、片言ではあれ、フラットにものを尋ねられる存在との会話は、大きな意味をもつのではないだろうか。もちろんこうした相互交流を実現するためには様々な面での整備が必要になる。両校間のより緊密な連携が必須であり、学生にもより深いラオス理解が求められるだろう。しかし、こうした困難があるとしても、国際社会実習をより充実したものにするため、試みてみるに値するのではないだろうか。

参考ウェブサイト

国際交流基金 2006 「世界の日本語教育の現場から（国際交流基金日本専門家レポート）希望に燃える新しい学科」

(https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/tounan_asia/laos/2006/report01.html、2017年5月30日取得)。

国際協力機構 「ラオス日本センター」

(<https://www.jica.go.jp/japancenter/laos/index.html>、2017年5月30日取得)。

ヴィエンチャンという都市 —— スタディツアーで見た風景から ——

高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科 3 回生

堅田 朱音 (B151E016K)

はじめに

本稿は、2016 年度に開講された「国際社会実習（スタディツアー）Ⅰ」の実施後レポートである。この実習で見聞きし、感じたことをもとに問いを導出し、先行研究を参考にしながらその問いに答えることを試みるのが、本稿の目的である。

「ラオスの歴史と文化に触れる旅」と題されたこの実習では、2017 年 2 月 18 日から 28 日にかけての 10 日間、ラオス人民民主共和国を訪れた。主な訪問先は、ラオス中部に位置する首都ヴィエンチャン特別市と、北部のシェンクアン県である。ヴィエンチャンでは、外国人観光客の多いホテル街の宿を宿泊先とし、仏教寺院や市場、国立大学、博物館などを訪問するとともに、周辺の店や夜市などの町並みを散策した。シェンクアンでは、戦争による不発弾の跡が多く残るジャール平原、爆撃で破壊された寺院、ピウ洞窟を訪れ戦争の歴史を学んだ。合わせて訪問した山地の村々では、世帯数や仕事の話の聞き取りを行い、目の前で機織りを実演してもらうなどした。こうした活動のなかで、ラオス人やラオス人ガイド、ラオスで暮らす外国人といったさまざまな人びとからさまざまな話をじっくりと聞く機会もあり、ラオスについてじっくり考える時間を持てた旅であった。

本稿では、そうした経験のなかでも、ヴィエンチャンという都市に注目し、その町並みにはどのような特徴があり、それがどのように作られているのかについて、都市に関する先行研究を参照しながら考察してみたい。まずⅡでは、実際に見たヴィエンチャンの風景を記述し、そこから、さまざまな要素が入り交じるヴィエンチャンの町並みはどのように作られているのかという問いを導く。Ⅲでは、生田真人『東南アジアの大都市圏：拡大する地域統合』[2011]を参照しながら、東南アジアの都市の特徴をふまえつつ、ヴィエンチャンが外部からの影響を受けながら変化している状況について説明する。Ⅳでは、遠藤薫「グローバル都市としての上海：租界・万博・郊外化そしてディズニーランド」[2011]を参考にし、観光地化によって都市がデザインされていく様相について整理し、その視点からさまざまな要素が入り交じるヴィエンチャンの町並みのあり方について考察する。最後にⅤで、全体のまとめを行う。

Ⅰ ヴィエンチャンの町並み

日の出から数時間経ち、太陽ですでに温められたコンクリートの道を歩く。道の片側には、黄色に赤、オレンジ、水色、緑といった 3、4 階建ての建物が並ぶ。1 階部分が薬局の所があれば、カフェレストランの所もある。もう片側には、白い壁に金の装飾の、何十軒もの家が収まりそうな大きな文化ホールや、塀に囲まれ植物が生い茂る織物工場が建っている。歩きなが

ら右を見ると、ある家の軒先で筋肉質な男性が座り込んでいる。彼の前には流し台とタイルがあり、水に濡れて光る魚が横たわっている。手には包丁が握られており、それを何度も魚に振り下ろしている。隣の家駐車スペースでは、3、40代ほどの女性2人が、中腰になって手を動かしている。2人の足元にはかごが4つ並べられている。それぞれ2つずつ、肩に担げるように木材で繋がれているようだ。かごの中には、野菜と果物が隙間なく詰められている。片方の女性と目が合った。軽く会釈をする。女性にじっと見つめられながら、その家の前を通り過ぎた。店の前に赤レンガが敷き詰められ、よく手入れされた花壇が並ぶ本屋と、「24h」と書かれたATMを通り過ぎる。

目線を前に戻すと、車とバイクが目の前を横切った。大通りに出る。車に巻き上げられた砂が、サンダルの際間から足にまとわりついた。車が途切れたところを見計らって道を渡る。前方には白い塀で囲まれた寺院がある。1ブロック分はずっと寺院の塀が続く。塀の向こうには金色の屋根がいくつか見え、道の真ん中に現れる寺院の門は、2階建ての建物と同じ高さである。門には朱色に金の細かい装飾がなされ、両側には、神社の狛犬のように緑の肌をした人型の像が建っている。塀の向こうに、Tシャツに短パンの人が手ぶらで歩いているのが見えた。大通りを抜け、寺院の塀伝いに左へ角を曲がる。水色、茶色、緑など、色とりどりの建物が何十メートルも向こうまで続いている。茶色を基調とした建物の1階はレストランになっていて、いわゆる欧米風のテーブル、イスが等間隔で並べられている。欧米人と見受けられる顔立ちの観光客が、そこに座ってコーヒーカップを口に運んでいる。少しずつ車道の騒音が遠くなっていく。数メートル歩くとレンガ造りのアジア料理屋がある。隣には、黒い壁と柱、白黒の床のオープンテラスが目立つイタリア料理屋が見えてくる。白いテーブルに白、黒のイスがセットで置かれ、小さな鉢に植えられた草花の緑が、店のまわりをぐるりと囲む。道路わきに停められたトゥクトゥクを避けるため、歩道を外れる。進行方向の歩道には、ホテルとレストランの看板がいくつもはみ出している。その間に挟まれ点々と、PEPSIのロゴが目立つ青いテントの屋台、菓子類を扱う売店などがある。何回か通って顔なじみになった売店のおばさんが、目が合うとにこりと笑ってくれた。

以上の風景の記述は、ヴィエンチャン滞在中のある朝、外出先からホテルまで戻る道中を描いたものである。このヴィエンチャンで私が滞在したホテルは、観光客向けのホテル、レストラン、カフェなどが立ち並ぶエリアであった。この町を初めて訪れた私にとって特に印象的だったのは、その町並みがさまざまな要素が入り交じって作られているという点であった。たとえばヴィエンチャンには、いわゆる「西洋」風の店が建ち並ぶホテル街の真ん中に仏教寺院があり、袈裟を着た僧侶が出入りをする光景が見られた。多様な言語の本を扱う書店がある同じ通りでは、男性が地面を水浸しにして魚を捌いていた。大型のショッピングモールの店舗では、最新の携帯電話が並ぶカウンターの裏で、赤ん坊が寝かされていた。ラオスの外からもたらされた「西洋風」「異国風」のモノや暮らしと、それらが入ってくる以前からあったであろう「ラオス風」のモノや暮らしが入り交じる風景は、私の眼には新鮮なものに感じられた。

以下では、ヴィエンチャンのこうした町並みがどのようにして作られているのかという点に焦点を当て、この点について2つの視点から考察してみたい。1つは「開発と市場経済化」と

いう視点であり、もう1つは「観光化」という視点である。ヴィエンチャンにおいて進行している変化をそれぞれの視点から考察し、それらを踏まえて、さまざまな要素が入り交じるヴィエンチャンの町並みの作られ方について考察する。

Ⅱ ヴィエンチャンにおける開発と市場経済化

まず、生田真人〔2011〕による東南アジアの都市についての説明を手がかりに、「開発と市場経済化」という視点から、ヴィエンチャンという都市で生じている変化について考察する。

1 東南アジアの都市の特徴

生田〔2011〕は、東南アジアは欧米諸国による植民地化を経験し、日本よりはるかに国際的な社会となったと述べる。第2次世界大戦後、東南アジアの植民地は次々に独立し、その経済と社会は大きな変化を遂げた。交通と通信技術の革新、各国の成長政策、欧米や日本・韓国系企業の進出が経済成長をもたらした。東南アジアの大都市圏は、空港や港湾施設などの都市の基幹的な施設を競って設備した。これは、先進国の多国籍企業を誘致するためである〔生田 2011：2-6〕。

1950年代初期はフィリピン、60年代前半はタイ、60年代後半はマレーシアとインドネシアといったように、東南アジアでは工業の拡大が見られた。各国の工業化の開始時期は異なっており、現地人、外国企業、華人、政府という経済活動の主体の関係も国ごとに異なる。例えば工業化初期のインドネシアでは、公営企業が重要であった。シンガポールやマレーシアも、政府系の公営企業が地域開発に貢献した。一方タイでは、中央政府や地方政府の貢献度が比較的低く、2000年以降はインドネシアでも公営企業の民主化が進んだ。人口という点で見ると、東南アジア各国は都市化の程度の差はあっても、首都人口が急増してきたことが共通している。1950年代では、首都人口は最大でも200万人ほどであった。しかし、30年後にはジャカルタとマニラの人口は約600万人に増加し、バンコクは500万人の大都市となった。2000年には、ジャカルタとマニラで首都圏の総人口が2千万人に達した。以前は都市郊外の農村であった地域に、工場や商業施設、住宅地が作られ、大都市圏に変わった。大都市圏の中心部は、多国籍企業の支店やホテル・商業施設が集中する地区となった〔生田 2011：11-13〕。

生田〔2011〕は、東南アジアの大都市圏には、日本の大都市圏との類似点と相違点があると述べ、そこから東南アジアの特徴について論じている。

まず類似点を3つ挙げている。1つ目の類似点は、どちらも工業が成長の基盤であることだ。ただ、東南アジアは関連の中小工業をあまり必要としない多国籍企業が中心である。日本は、多くの中小工業の上に大企業が成長したという点で異なる。2つ目の類似点は、土地利用の変化の仕方である。日本も東南アジアも、過剰都市化段階から工業開発へ、さらに世界都市化へと転換してきたという。3つ目の類似点は、大都市圏開発で国家、中央政府が強く主導することだ。ただ、スペインとアメリカの植民地であったフィリピンは、民間企業（財閥）の力が大きかったようである〔生田 2011：21-22〕。

次に相違点も3つ挙げている。1つ目の相違点は、都市社会の状況である。東南アジアは日

本よりはるかに、世界各国や近隣諸国とのボーダレス化が進んでいる。2つ目の相違点は、交通や住宅などの整備水準である。日本の大都市圏は、都市圏の形成と鉄道による公共交通の整備が同時に進んだ。一方東南アジアの大都市圏は、公共交通はバスが主流で、自動車による背的交通が発展した。3つ目の相違点は、行政における大都市の位置づけの違いである。東南アジアの大都市圏は、国の行政機関の一部であり、国と一体化していることが多い。日本よりその自治能力は低いという [生田 2011: 22-24]。

2 ヴィエンチャンで進行する開発と市場経済化

以上の整理に加えて生田は、大都市圏を検討する際は、市街地が形成されるプロセスの相違にも注目すべきだと述べる。これは、主体が公共部門なのか、それとも民間企業に依存しているのかということである [生田 2011: 24]。これらを踏まえ、ラオス、特にヴィエンチャンの開発と変化の様相について整理しよう。

ヴィエンチャンは、ラオス人民民主共和国の首都であり、2013年の調査によると人口は81万人である。都市はメコン川沿いに広がり、メコン川の向こうはタイである。年間の平均気温は26.8度、年間の総降水量は1499.7ミリである [JETRO 2015: 4-5]。ヴィエンチャンは、チャンタブリー区を中心に9つの区で構成される。メコン川の河畔から町の中心を貫くラーンサーン通りには、植民地時代の遺構が残っており、この区域には政府官庁も集まっている。ラーンサーン通りの終着点にはパトゥーサイというパリの凱旋門を模した門がある。ヴィエンチャン市内には多くの仏教寺院があり、1566年にセーターティラート王が造営したタート・ルアンは、ラオスの象徴として信仰を集めているという。1560年、ラーンサーン王国のセーターティラート王がルアンパバーンからこの地に遷都し、王国の都となった。18世紀初めに同王国が分裂した際も、ヴィエンチャンはヴィエンチャン王国の都であった。1827年には、シャム（タイ）との戦いにアヌ王が破れ、シャム軍によって町は破壊された。1899年にフランスがラオスをフランス領インドシナ連邦に編入すると、ヴィエンチャンは首都に定められた。1975年の社会主義革命を経てから現在まで、首都として政治・経済・文化の中心地である [桃木ほか 2008: 352]。

生田によれば、1980年代以降のラオスの主な収入源は、木材の販売、観光収入、水力発電で得た電力のタイへの供給であった。しかし、近年のラオスの経済成長を主導しているのは、外資導入である。ラオスへの直接投資で大きな割合を占めるのは、タイ・中国・ベトナムなどである。2010年では日系企業も65社進出しており、その数は増加傾向にある。進出企業の約半数は、ヴィエンチャンに集中しているという。韓国の進出も目立っている。日系企業は、ラオスを工場生産の現場としてみなす傾向があるのに対し、韓国系企業はラオスを消費市場とみなす傾向があるようだ。ヴィエンチャン郊外の大規模開発も問題となった。これは、大規模な湿地帯を開発して工業団地とする計画であった。市当局に加え、中国の上海近郊などでも開発を行う会社によって進められた。しかし、この地域に居住する世帯が多く、湿地帯が洪水を防止するための池として機能していることから、国と住民が対立した。国連の関連機関も湿地帯の保全を提言し、約10平方キロメートルに及ぶ大開発は中止となった。計画は、代替地で進められることになったという [生田 2011: 146-147]。

上記のように、近年のラオスでは、海外からの直接投資や外資系企業の進出が増加しているようである。実際にヴィエンチャンを歩いていても、サムスン、東芝、資生堂といった看板を見かけた。トヨタの車が多く走っており、タイ、ベトナムなど外資系のカフェ、レストランも進出している。ラオス滞在5日目には、Rimping マーケットというタイ系のスーパーマーケットに訪れた。肉、野菜のほか、外国の商品を中心に扱うこの大きな店は、最近できたばかりだとガイドさんが話していた。タラートサオという大型ショッピングモールには、MINISO 名創優品という中国系ショップが入っていた。このショップは、タイなどにも進出している。JETRO の2015年の調査によると、ヴィエンチャン中心部では高層の建物は制限されているが、2014年頃から大型商業施設の建設ラッシュが起きているという。これは中国資本が中心となって行っている。人口は周辺国と比較して少ないものの、ヴィエンチャンだけの1人当たりGDPは、2015年に4000ドルを超えるとされている。これはベトナムを抜き、タイにも迫る数字である [JETRO 2015: 5-10]。

政府が規制緩和などで外貨参入を促し、その成果もあってか外資系企業の参入が増加している。ヴィエンチャン市内では、外資系企業の入ったオフィスビルや大型商業施設が次々に建設され、所得向上などにより、ヴィエンチャンは魅力的な消費市場にもなりつつある。JETROによれば、服などの繊維製品はタイ、ベトナム、中国から多く流入しており、個人輸入のセレクトショップでは韓国製の服も人気があるという。タイの食品をメインに扱うコンビニもあり、2015年にオープンした日本人経営の店では、直輸入した日本の食品が売られている [JETRO 2005: 12-23]。開発と市場経済化が進み、タイ、ベトナム、中国をはじめとする諸外国から、企業やモノが大量に流入するようになった。これらが、近年のヴィエンチャン開発にみられる特徴の一端である。

Ⅲ ヴィエンチャンにおける観光化

次に、遠藤薫「グローバル都市としての上海：租界・万博・郊外化そしてディズニーランド」[2011]を参考に、「観光化」という視点から、ヴィエンチャンという都市がどのように作られているのかを考察したい。

1 観光化と都市の変化 —— 上海の都市再開発の事例

遠藤は、「これまで不完全なカタチであれ欧米化することを一つの目標としてきた（されてきた）アジア諸国が、「新しい段階」へシフトしつつあり、必ずしも従属的でない立場に立とうとしている」と述べた上で、グローバル都市としての上海について論じている [遠藤 2011: 76]。遠藤の議論の内容を整理することで、まず「観光化」という視点を確認しておこう。

遠藤は、グローバル都市の基準として、知名度が高い、人口が多い、交通網が整備されている、ハブ機能をもつ国際空港がある、国際機関がある、都市内部に複数の移民コミュニティがある、国際的な金融機関や証券取引所、大企業がある、世界的な通信社、マスメディアの本拠地である、先端的な情報インフラが整備されている、国際的な大学、文化施設などが存在する、といったさまざまな条件を挙げている [遠藤 2011: 77-78]。上海はこれらの条件を満たす、まさに

グローバル都市の1つと言える。

このようなグローバル都市である上海では、現在、都市再開発が進んでいるという。ただし、上海で起こっている再開発は、1960年代から70年代の日本の都市再開発とは様子が異なるようだ。日本は、勤労者の住宅を郊外化し、中心部はあくまで近代化が目指された。東京タワー、新幹線など、「日本一」「世界一」を掲げ、過去をなぎ倒すように空間のバージョンアップが行われたという。これに対して上海は、たしかに古い住宅を一掃して郊外化を進めているものの、同時に「観光地化」という方向性も強く意識しているのである〔遠藤 2011:89〕。

上海が観光資源として提示するものとして、遠藤は4種類のタイプを挙げている〔遠藤 2011:89-93〕。第1のタイプは、躍進するグローバル都市としての上海を表現するエリアである。第1のタイプの街区では、最新設備を備えた空港、地下鉄、最先端の高層ビル群が次々に建設されている。これらは実用的な都市機能を果たしている一方で、誇示、パフォーマンスでもあるという。「都市の成長過程」はそれだけで観光資源になるのである。

第2のタイプは、過去の上海の風景を目玉とするエリアである。第2のタイプは、19世紀末から20世紀初頭にかけて、「東洋のパリ」と上海が呼ばれていた時代の面影を残す街区である。河辺から植民地通りにかけてあったかつての租界は、老朽化した建物を再建し、今では美しい風情を再現している。

第3のタイプは、古くからある観光地をそのまま活かしているエリアである。第3のタイプは、豫園（よえん）などが例として挙げられる。豫園とは、1559年から1577年にかけて造られた庭園で、東京でいうと浅草のような場所であるようだ。そこには、小籠包を売る飲食店、いかにも中国らしい土産物屋が並ぶ〔遠藤 2011:89-93〕。

そして第4のタイプは、〈過去〉の再創出とも言うべきエリアである。第4のタイプは新しい観光地であり、遠藤いわく現在最も「おしゃれ」な観光スポットになっている。その代表が「田子坊（ティエンヅファン）」である。ここでは、古い工場街をサブカルチャーに彩られた街区として再生させるという動きがある。世界各国からアーティストが集まり、昔ながらの建物にアトリエやカフェ、バー、レストラン、雑貨店が入居している。店の外観にはそれぞれ創意工夫が凝らされている。ニューヨークのソーホー地区を連想し、「上海のSOHO」とも呼ばれているという。ただし、田子坊はニューヨークのソーホー地区と異なる点がある。それは、そこに下敷きにされているローカルな文化が、そもそも19世紀グローバリズムによって強制された半グローバル文化であるということだ。しかし、中国の歴史的苦痛が根底に流れているはずが、田子坊を紹介する記事などは透明な明るさで満ちている。田子坊は、他の3つのタイプを組み合わせで創られた人工の街なのだという〔遠藤 2011:93-96〕。遠藤は、「そこには、ノスタルジックな雰囲気があふれ、かつてあったはずのエキゾチシズムが人びとを楽しませる。しかし、実際には、かつてそんな街が存在したことはなかった。貧しい工場街や長屋風の住まいに生きた人びとは確かにいたのだが、現代のおしゃれな田子坊からは、そうした過去においてはきれいにぬぐい去られている」〔遠藤 2011:96-97〕と解説する。おしゃれな街として人気になった田子坊の街並みは、創られた過去なのである。

ポストモダン社会においては、こういった過去の観光資源化は積極的に行われていると遠藤は述べている。その街の現在のなかに現存する過去を見せるのではなく、現在自体を過去の

テーマパークへと改造するのである。上海では過去の現実を追求するのではなく、都市をテーマパーク化し、過去の幻を展示するという商品化が起こっている。上海がグローバル世界に最もアピールできる都市観光の資源は、19世紀のグローバリゼーションにおいて、欧米列強と当時の上海市民たちが予期せず共同で創り出したものであった。これは西洋からも東洋からも「異国」であり、部分的に「ノスタルジック」であるような、存在しない過去の上海である〔遠藤 2011：98-99、108〕。

2 観光化が進むヴィエンチャン

私は、遠藤が述べた「西洋からも東洋からも異国」という捉え方を、ヴィエンチャンの今に当てはめることができるのではないかと考える。ヴィエンチャンでは、第1のタイプのように高層ビルの建築、交通網の整備などが進んでいる。文化ホールや数々の大型商業施設も建設された。第3のタイプのように、ワット・シーサケート、タートルアン、パトゥーサイなど何百年も前からある建造物を利用した観光エリアも人気である。一方で、ホテル街には真新しいレストランやカフェと、昔ながらといった風の売店、食堂が並んでいる。レストランなど外来のモノが「ラオスらしく」変容し、ラオス的なモノが変化、またはより「ラオスらしく」変わっている様は、遠藤が提示する第4のエリアとして捉えることもできる。そのなかでも特に注目したいのは、遠藤の述べた第1と第4のエリアの側面、そして上記のタイプには当てはまらない、もう1つの新たな側面である。これら3つの側面から、ヴィエンチャンを考察する。

まず第1のエリアの側面からヴィエンチャンを見てみよう。本稿の第3章2節で述べたようにヴィエンチャンは今まさに、都市として発展を遂げる姿を表現していると言える。政府の規制緩和や外資系企業の参入等により、市場経済化が進んでいる。そうやって流入する、ラオスにとって外来のモノのなかには、この地に取り込まれることでラオスの文脈に合う形に変容しているモノもある。たとえば、フランスパンやコーヒー、観光客向けレストランの景観などがそうである。遠藤が述べたように、上海では西洋の影響を色濃く受けた、ファッショナブルでモダンな植民地の文化が根付いた〔遠藤 2011：97〕。ラオスも、フランス植民地下にあった影響が今も残っており、フランスパンは「カオ・チー」として朝食の定番である。ヴィエンチャン市内では、「カオ・チー」がメニューに入っている観光客向けのレストランやホテルをいくつも見かけた。「カオ・チー」はフランスのフランスパンより粘性があり、好みの具材を挟んで食べる。ヴィエンチャン市内のカフェに必ずあったのは、ラオス式のコーヒーである。ラオス式コーヒーはネルドリップ方式でドリップし、練乳をたっぷり入れて飲む。外来のモノが変容しているのである。ホテル街付近を歩くといくつも見つけることのできる日本食レストランも、純「日本風」であるように見えて、実際に日本にある料理屋などとはどこか違う雰囲気を感じ出していた。神社の鳥居のマークと「Tokyo」の文字が書かれた寿司屋の看板や、城の屋根の形をしたタコ焼きの屋台などは、日本ではあまり見かけない。外から入ってきた「日本」らしいモノが、まさにこの地の人びとによってイメージされた日本といった外観、メニューに姿を変えている。ヴィエンチャンは、遠藤が述べる第1のタイプと類似した、「躍進するグローバル都市としてのヴィエンチャン」を表現するエリアである。同時に、ただ外来のモノが元の姿のまま組み込まれているのではなく、暮らしと結びつきながら、ラオスの文脈に合うような

形で組み込まれているのである。

次に、第4のエリアという視点からヴィエンチャンを考える。外来のモノが「ラオスっぽく」変化しているというのはすでに述べた。では、都市化の過程において外来のモノが流入する以前からあった、ラオス的なモノは変わらず残っているのだろうか。遠藤の言う上海の第4のエリアは、イメージの表象によって現在自体を過去のテーマパークへと改造していた〔遠藤2011：98-99、108〕。ヴィエンチャンでも、この第4のエリアのようにイメージの表象による過去の遺産の観光地化が進んでいる。例としては、ヴィエンチャン市内の寺院が挙げられる。私が訪れたワット・シーサケート、ワット・ポーパケオはその傾向が顕著であった。ワット・シーサケートの敷地内を歩いているのはほとんどが観光客で、入り口には入場料を徴収する係員が常駐していた。本堂で祈りを捧げる女性を1人見た以外は、カメラを構え仏像を眺めながら散策する人ばかりであった。ワット・ポーパケオは改装されたばかりらしく、3段に重なった屋根、赤と白を基調にし、本堂全体に施された金の装飾が印象的であった。ガイドブックで見ると、まさに「ラオス」といった様子の寺院である。ここでも敷地内を歩いているのは観光客ばかりで、なかには日本人の修学旅行生のように、揃いの制服に身を包み本堂を見学する子どもたちの姿もあった。ヴィエンチャンにある寺院は、外来の人びとが入り込む空間となり、イメージされた「ラオス」の形に合うよう観光地化されている。このようにヴィエンチャンでは、ラオス的なモノは外来のモノを取り込みつつ変化、またはより「ラオスらしい」姿へと変容している。

もう1つ、上に挙げた2つの側面に当てはまらない特徴が、ヴィエンチャンにはある。それは、「暮らし」と「仕事」が必ずしも分離していないことである。この特徴は先に挙げた2つ以外にも、エリア問わず見られた。例として、売店や市場、ショッピングモールなどを挙げたい。ホテル街にある、打ち放しコンクリートの壁の売店では、すぐ奥が居住スペースになっており男性がくつろいでいた。洋服、サンダル、電子機器がずらりと並ぶ夜市は、どれも似たようなデザイン、値段、品ぞろえで、テントも赤で統一されていることから、一見均質化されているように思える。しかし、店の手伝いがてら店主の家族がくつろいでいる光景などが見られた。タラートサオの一部の店では、レジカウンターの裏で男性が小さな赤ん坊と毛布にくるまって寝ていたり、布屋の陳列棚下の椅子に食べかけの食事が置かれていた。同じタラートサオ内にある外資系ショップのMINISOや、郊外にできたRimpingマーケット、ホテル街にあるイタリア料理店などでは、そのようなことはなかった。仕事をする人は、仕事にだけ専念していた。誰かがそこで暮らしていることが分かる、もしくは食事や睡眠をとった痕跡のあるものは排除されていた。少なくとも日本のショッピングモールはMINISOやRimpingマーケットと同じく、働く人の「暮らし」と「仕事」がはっきり分離されている。しかしヴィエンチャンでは、必ずしもその分離は行われていない。タラートサオなど新たに開発された空間のなかでも、「暮らし」と「仕事」の同居が起こっており、それらが溶け合っているのである。

生田が述べたようにヴィエンチャンは、政府の規制緩和や外資系企業の参入などもあって、各所で開発が進む都市である。政治、商業、観光など数々の小さな核が狭い範囲に集まり、隣接・融合している。街では、ラオス人、在住外国人、観光客など、生まれの背景、ヴィエンチャンでの過ごし方、ニーズの異なる人びとが入り交じって暮らしている。遠藤の述べた第1のエ

リアのように、ヴィエンチャンは都市化する様を表現していると言える。一方で、流入してきた外来のモノは、暮らしと結びつきながら、ラオスの文脈に沿って組み込まれていく。第4のエリアとして考えてみると、イメージの表象による過去の観光資源化が起こっている。寺院など都市化により外来のモノが入ってくる以前からあったモノは、より「ラオスらしい」形へ変容している。もう1つ別の側面から考えてみると、ヴィエンチャンはエリア問わず、参入してきた外資系企業とは対照的に「暮らし」と「仕事」が明確に分かれていないという特徴をもつ。これら3つの要素が融合することで、遠藤の言う「西洋からも東洋からも異国」であるような、ヴィエンチャン独特の町並みが現れているのである。

ヴィエンチャンでは、2つのエリアが溶け合い、異なる背景をもつ人びとが「西洋風」「ラオス風」などと明確にパターン化できない風景を作り出している。そのため、ヴィエンチャンの風景からは、遠藤の言うような「西洋からも東洋からも異国」、つまり他の外国でも従来のラオスでもない「異国」を感じる。開発が進むなかで、「暮らし」と「仕事」がはっきり分かれていない光景が見られることも、ヴィエンチャンの特徴の1つであろう。この「異国」を感じるといのは、ヴィエンチャンがラオスではないという意味ではない。ヴィエンチャンは今まさに大きな変化の途中であり、今ある風景がヴィエンチャンに定着しきっていない。そのため、これは私が日本や映像で見てきた「ラオス以外の諸外国、地域」と、シェンクアンや文献、写真で見てきた「ラオスの他地域、過去」のどれとも異なるという意味での「異国」である。

おわりに

本稿は、高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科の開講科目である、2016年度「国際社会実習（スタディツアー）Ⅰ」の実施後レポートとして、ヴィエンチャンという都市はどのように作られているのかという問いを立てた。まずⅡでは、実際に見た風景を記述し、その風景から、さまざまな要素が入り交じるヴィエンチャンという都市はどのように作られているのかという問いを導いた。Ⅲでは、生田真人『東南アジアの大都市圏：拡大する地域統合』[2011]をもとに、東南アジアの都市開発を概観しつつ、ヴィエンチャンが外部の影響を受け変化している状況を説明した。Ⅳでは遠藤薫「グローバル都市としての上海：租界・万博・郊外化そしてディズニーランド」[2011]の論を参考にし、観光地化によってデザインされていく都市の姿について整理した。そのうえで3つの側面からさまざまな要素が入り交じるヴィエンチャンの町並みのあり方について考察した。

そして以下のように結論付けた。ヴィエンチャンの町並みのあり方は、開発と市場経済化、観光地化という2つの視点から捉えることができる。生田の論やJETROのデータが示すように、政府の規制緩和や外資系企業の参入によって、ヴィエンチャンでは開発と市場経済化が進む様子が窺える。同時に、観光地化も進んでいる。本稿では、遠藤が挙げた上海の例を使って、ヴィエンチャンの観光地化を3つの側面から考えた。1つ目は開発が進み、外来のモノが流入しつつも「ラオス風」に変化している側面、2つ目は「ラオスらしい」のモノが外来のモノを取り込み、またはより「ラオスらしく」変容している側面である。そして3つ目は、そうした側面が見られる空間のなかで、「暮らし」と「仕事」がはっきりと分離していないという側面

である。この3つの要素が、他の外国とも従来のラオスとも異なる「異国」感を作り出していると考えた。

開発と市場経済化、観光地化が、ヴィエンチャンの町並み形成の一端を担っていると考えられ、私が現地で見たヴィエンチャンの風景は、以上に述べたような要素を含んで現れているのである。今回、ヴィエンチャンに暮らす人びとにも目を向けたが、都市構造と人びとの暮らしの相互関係について、十分に考察することはできなかった。これは今後の課題としたい。

参考文献

- 生田真人 2011 『東南アジアの大都市圏：拡大する地域統合』、古今書院。
- 遠藤 薫 2011 「グローバル都市としての上海：租界・万博・郊外化そしてディズニーランド」、遠藤薫編 2011 『グローバリゼーションと都市変容』、世界思想社、76-113。
- 竹田晋也 2010 「森の国ラオス：暮らしを支える雨緑林の恵み」、菊池陽子ほか編 2010 『ラオスを知るための60章』、明石書店、31-34。
- ハリス・D・チャウンシー／ウルマン・L・エドワード 2012 「都市の性質」、原田謙訳、森岡清志編『都市空間と都市コミュニティ』（都市社会学セレクション 第2巻）、日本評論社、19-37。
- 矢野順子／増原善之 2008 「ヴィエンチャン」、桃木至朗ほか編『新版 東南アジアを知る事典』、平凡社。
- 安井清子 2010 「居住地の高度による民族分類：民族分布、分類の方法、分布状況」、菊池 陽子ほか編 2010 『ラオスを知るための60章』、明石書店、19-22。

参考ウェブページ

- 外務省 2015 「ラオス人民民主共和国基礎データ」、『ラオス人民民主共和国』
(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/laos/data.html>、2017年3月27日取得)。
- 林野庁 2012 「都道府県別森林率・人工林率」、『統計情報』
(<http://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/genkyou/h24/1.html>、2017年3月27日取得)。
- JETRO 2015 「ヴィエンチャンスタイル」、『調査レポート』
(https://www.jetro.go.jp/ext_images/world/reports/2015/pdf/09c17e798d98972d/vientiane8.pdf、2017年4月4日取得)。

平成 28 年度フィリピン(ルソン島ビコール地方)における「国際社会実習」実施報告

開講科目名：国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ

1 実習の趣旨

本実習は国際社会に関する学習と国際交流を目的とするものである。

協定校ビコール大学では5日間の滞在中、フィリピンの学生や教員との多様な交流活動を通じて異文化理解の素養を身につける。また、ビコール地域の地場産業である雑貨・食品の加工、サンミゲル島における漁業の現場を視察することにより、地方のインフラや生活の状況を知り、地域社会発展の可能性や課題について考える。最終日のマニラでは、マニラ駐在の日本人ビジネスパーソンからフィリピンの社会情勢について話を聞き、観光を兼ねて市街地を視察し、アジア最大のショッピングモールを訪ね、都市部の発展の状況を観察する。

ツアー全体を通じ、他国の人間・文化・社会を理解するとともに、日本についても相対的に理解する契機とする。

2 実習の概要

事前学習：2016 年 10 月～2017 年 1 月

現地実習の期間：2017 年 2 月 12 日（日）～2 月 19 日（日）

現地実習の開催地：フィリピン ルソン島ビコール地方（ビコール大学タバコキャンパス
滞在）

事後学習：2017 年 2 月 23 日 振り返り 2 月末締切り レポート作成

担当教員：中川 香代 人文学部社会経済学科 教授（引率）

新保 輝幸 同 教授（引率）

野崎 華世 同 講師（引率）

堀 美菜 同 講師（日本における企画・準備・事前事後の指導に参画）

3 全体の概要

1) 事前学習：2016 年 10 月～2017 年 1 月（毎週月曜 12：10～13：00（50 分）×17 回）

①フィリピンについての学習（地理・歴史・政治・経済・文化）

②ビコール地方についての学習（地理・島の漁村・大学）

③視察先についての学習（マニラ、ビコールの産業、企業、JETRO）

④英会話（自己紹介、折り紙の折り方の説明）

⑤フィリピン人院生（黒潮研）と英会話で交流

⑥海外旅行中の行動について（入出国カードの記入法 通貨と両替 安全管理）

⑦観光・体験・交流企画についての話し合い

2) 英会話自習

- ① OASIS での自習（スタンプカード利用）スタッフに、レベルに合った教材を案内してもらう
- ② 英会話クラスに参加（授業がない希望者のみ参加）

3) 現地実習： 2017 年 2 月 12 日～19 日

2 月 13－17 日 ビコール大学タバコキャンパス滞在中の活動内容

- ① ビコール大学の学生との交流（双方の学生がペアになり日常生活を過ごす市内散策
料理交流 文化交流）
- ② サンミゲル島ツアー：漁村生活・海洋環境保護活動の学習 村長を表敬訪問
- ③ 地場産業視察ツアー：カゴ製品、陶器、ナッツ菓子工場、ヤシの殻の繊維製品の工場
- ④ 社会見学ツアー：ソーシャルワーカーの教員の案内で、孤児院、麻薬中毒者更生施設を訪問し、施設内の担当者、孤児、麻薬更生者との交流
- ⑤ ビコール大学教員による英会話研修

2 月 18 日 マニラでの活動

- ① 三菱自動車社員（元 JETRO 駐在員）による「フィリピンの経済・政治情勢」セミナー
- ② 市内観光 巨大ショッピングモール視察

4) 事後学習

- ① スタディツアーの振り返り会 2 月 23 日 12：00－13：30
- ② レポート提出 2 月末

4 詳細な日程

1) 全体の日程

2 月 12 日 8：15 高知空港集合
9：35 高知空港発
10：50 羽田空港着
15：05 羽田空港発
19：40 マニラ着
H I S 専用車にてホテル「Red Planet Aseana」へ

2 月 13 日 6：40 H I S 専用車にてマニラ空港へ
9：10 マニラ空港発
10：10 レガスピ空港着
大学送迎車にてビコール大学へ

2 月 13 日	ビコール大学着	ビコール滞在中は下のスケジュール
2 月 18 日	ビコール大学発	

大学送迎車にて空港へ
10：55 レガスピ空港発
11：55 マニラ着

19:00 H I S 専用車にてホテル「Red Planet Aseana」へ
 2月19日 6:25 H I S 専用車にて空港へ
 8:55 マニラ空港発
 14:00 羽田空港着
 16:55 羽田空港発
 18:25 高知空港着

2) ビコール大学滞在中の日程

PROGRAM OF ACTIVITIES		
DAY & TIME	ACTIVITY	RESPONSIBLE ENTITY
DAY 1 Feb 13, 2017	Arrival	
10:35A.M-11:00A.M.	Arrival	Prof. Plutomeo M. Nieves & Driver
11:00A.M-12:00N	Courtesy Call to the Bicol University President	Dean Maria Asuncion V. Oronan
12:00N.-2:00P.M.	Lunch in Legaspi City (All-you-can-eat)	
2:00P.M-3:00P.M.	Accommodation & Quick Rest	Dr. Subagan & Ms. Katrina Canon
3:00P.M-5:00P.M	Presentation to BUTC Administration and Faculty Courtesy Call to Tabaco City Office (Vice Mayor)	Dean Maria Asuncion V. Oronan Ms. Katrina Canon & Selected BUTC Students
7:00P.M-9:00P.M	Dinner at the City Center with the Students	Tour Guide & Selected BUTC Students
DAY 2 Feb 14, 2017	Observation Tour	Prof. Ninfa R. Pelea, Prof. Grace B. Brizuela, Ms. Ma. Luisa Tango & Katrina Canon
7:00A.M.-9:00A.M.	①Ceramics Plant in Tiwi	
10:30A.M.-11:30A.M.	②Coco-Fiber in Camalig	
11:30A.M-1:00P.M.	Lunch Break	
1:00P.M.-2:30P.M.	③Handicraft in Camalig Sumlang Lake	
2:30P.M.-3:30P.M.	④Pilinut Processing, Daraga	
3:30P.M.-4:30P.M.	Cagsawa Ruins, Daraga Lignon Hill	
	Dinner in Legaspi City	Tour Guide & Students

DAY 3 Feb 15, 2017	Conversational English Language Course	Prof. Guilber Oraye
8:00A.M.-12:00 A.M.	Campus Tour Conversational English Language	Students Prof. Guilber Oraye
12:00A.M.-1:30P.M.	Lunch Downtown	Tour Guide & Students
2:30P.M.-4:30P.M.	Conversational English Language	Prof. Guilber Oraye
4:30P.M.-6:30P.M.	Let's Cook Dinner Together	c/o Katrina Canon
DAY 4 Feb 16, 2017	Social Interaction Activities	Ms. Shiela Bustamante
8:00A.M.-12:00A.M.	Have fun playing Charades & Games Interaction (Teach me How) Japanese Students-Filipino Students <ul style="list-style-type: none"> • Origami Making • Proper way to use Chopsticks Basic Nihongo	Selected BUTC Students
12:00 A.M.- 1:30 P.M.	Lunch Downtown	Selected BUTC Students
1:30P.M.- 9:00P.M.	Orphanage : Holy Cross Children's Home Drug Rehabilitation Center: Malinao Treatment and rehabilitation Center Visit to Mayon Rest House Karaoke Dinner at the City Center	Ms. Ma. Luisa Tango & Prof. Guilber Oraye
DAY 5 Feb 17, 2017	Trip to San Miguel Island and Lecture	Mr. Antonino Mendoza, Dr. Nieves and 5 Research Staff
8:00A.M.-12:00A.M.	SMI Interaction & Dive Observation in BUTC Coral Restoration Project	
12:00 A.M.- 1:00 P.M.	Lunch in SMI	
1:00PM-3:0PM	Walking to Rawis--> Travel to Tabaco Port by Boat	

16:00P.M.-17:00P.M.	Lecture-Discussion – Coral Restoration Project	Dr. Nieves
7:00P.M-9:00P.M	Farewell Party	Dean Maria Asuncion, V. Oronan, Dr. Nieves, Prof. Ninfa R. Pelea, Prof. Grace B. Brizuela & Katrina Canon
DAY 6 Feb 18, 2017	Departure: Home Sweet Home	Katrina Canon & Driver

5 経費

【学生の参加費】

国内線航空券代金	¥ 30,000
国際線航空券代金	¥ 67,500
ホテル代（マニラ 2 泊）	¥ 12,500
送迎代（マニラ）	¥ 15,000
共有費（共通の食費等）	¥ 7,000
コラボレーションルーム使用料 （ビコール大学内宿泊料）	¥ 2,400
活動費（ボート代）	¥ 1,000
合計	¥ 135,400

【高知大学側の経費】

(1) 教員が実習実施に要する費用（交通・日当・宿泊費）の見込み

一人当たり 223,280 円 × 3 名分 = 669,840 円

(2) 車両借り上げ（マニラでの移動：4 日分）：105,000 円

(3) 会議室借り上げ：22,000 円

総額：796,840 円（学生負担分は含まず）「機能強化経費」より支出。

不足分については、引率担当教員の個人予算（教育 / 研究経費）より補填。

【ビコール大学側の経費（予算）】 PhP 53,000.00.

LINE ITEM BUDGET	
Item Expenditure	Amount (PhP)
1. Purchase of Printed Souvenir T-Shirt : 24pcs @ 200	4,800.00
2. Procurement services for tarpaulin streamer printing: 3 x 5 ft @ 350 x 2 units	700.00
3. Gasoline allotment @ 1,000/day x 6 days	6,000.00
4. Boat hire @ 5,000	5,000.00
5. Food services procurement @ 36,500 for 5 days except dinner	38,250.00
Total	54,750.00

Detailed Catering Services Estimates

No. of Days	Specification	No. & Cost/unit	Cost (PhP)	Remarks
	Arrival in Legaspi and Courtesy Call to the President			
Day 1	Arrival Lunch in Legaspi City	13 pax @ 250	3,250.00	Dean, Asst. Dean, PMN & 2 drivers
	Afternoon Snack	25 pax @ 150	7,500.00	KU: 5 students & 3 Faculty BUTC Compliments
	Dinner at Tabaco City Center	20 pax @ 250	5,000.00	BUTC & KU Tour Guide & Students
	Social Interaction Activities			
Day 2	Lunch downtown with the students	14 pax @ 200	2,800.00	BUTC: 5 student –partners, 1 Faculty & Driver / KU: 5 Students & 3 faculty
	Dinner with the students in Legaspi City	20 pax @ 250	5,000.00	BUTC: 5 student –partners, 2 Faculty & Driver / KU: 5 Students & 3 faculty

	Conversational English Language Course			
Day 3	Lunch downtown with the students	14 pax @ 200	2,800.00	BUTC: 5 student –partners, 1 Faculty & Driver / KU: 5 Students & 3 faculty
	Let’s cook our dinner (Collab.)	18 pax @ 200	3,600.00	c/o Katrina Canon
				KU: 5 students & 3 Faculty / BUTC: 5 student partners, & 5 Faculty
Day 4	Observation Tour			
	Lunch in Legaspi City	20 pax @ 250	5,000.00	BUTC & KU Tour Guide & Students
Day 5	Trip to San Miguel Island and Lecture			BUTC: 5 student –partners, 3 Faculty, Photographer & 5 RAs/
				KU: 5 Students & 3 faculty
	Lunch in SMI	22 pax @ 150	3,300.00	Fast food Packed-lunch from
TOTAL			38,250.00	

※ ボート代、数回の夕食費のみ高知大学側が支払う。

6 参加学生の報告書

フィリピンスタディツアー報告書

国際社会コミュニケーション学科

3年 長島 颯也

I はじめに

今回、私がフィリピンスタディツアーに参加した目的は、英語の力を鍛えること、及び東南アジアの国を実際に見てみたい、という2つが存在する。前者は文字通りであるが、後者は私が就職するにあたってのことである。私は就職したら東南アジアへ海外赴任を希望しているが、実際にどんな国かを理解していなかった。その為、現地を直接確認したかったという理由と、フィリピンは将来的に発展する可能性を大いに秘めているという理由によって参加することを決めたのである。参加してみて感じた感想や考察を写真等を交えながらこの報告書に記していきたい。

II 感想・考察

フィリピンでの滞在における感想、考察等を日にちごとに記していく。なお、使用する写真はすべて私が撮影したものである。

1日目

一日目は主に移動であった為、感想等はほとんどないが、フィリピンに到着後に移動する際にいろいろと驚かされた。第一に、車の数が日本とは比べ物にならないくらい多いことがある。理由は後述するが、空港の周りや主要な道路は夜にも関わらず車やバイクが非常に多かった。クラクションがひっきりなしに聞こえており新鮮味を感じた。第二は私の予想以上に発展していたことである。東南アジアと言えば開発途上国というイメージが頭の中で定着してしまっていた為、高層ビルの多さに驚かされた。また、日本にあるお店や看板が多かったのも興味を持った。



鶏の照り焼き丼：ホテルのレストランにて
(2017年2月12日)

ホテルの横のレストランでも「トンカツ」や「照り焼き」といった日本由来の食べ物が多いことにも気になった。これは私たちの泊まったホテルには日本人が比較的多いということが考えられる。

2日目

ホテルの設備が良かったこともあり、体をしっかりと休ませることができた。2日目はビコールへの移動と、あちらの生徒との対面会があった。マニラ空港→レガスピ空港→ビコールへと移動したわけだが、最初のマニラ空港は近代的な空港で後発途上国とは思えないようだった。レガスピ空港は比較的小さい空港ではあったが、人が多く活気に満ちていた。そこからビコール大学に向かい、学長挨拶及び日本人留学生と交流をし、私の後輩である留学生からフィリピンの暮らしを詳しく教えてもらった。「韓国人」とからかわれるのが嫌であるとのことだったが、フィリピン人は東アジアの人を大体は韓国人だと考えているのだろうか。その辺りは詳しく調べると面白そうであると感じた。その後、ビコール大学タバコキャンパス（以下 BUTC とする）に向かった。道中は景色を観察して、フィリピンの景色は日本と似ているということが分かり、理由としては田んぼが多いことが挙げられる。一面田んぼの景色というものも多かったので日本の景色と類似していた。BUTC に到着したらすぐにオリエンテーションが開かれ、あちらの生徒と対面し、お互いの自己紹介を済ました。不安が多かったが、あちらの生徒はノリがよく気さくであったのと、私たちの英語を一生懸命理解しようとしてくれたことによってすぐに打ち解けることができた。その後のレストランでは完璧に打ち解けることができた。



滞在場所（2017年2月13日撮影）

タバコキャンパス付近は比較的治安が良いとのことであったが、それは警備員の多さが理由として挙げることができるだろう。どのお店の入り口にも警備員が立っており、腰に大きい拳銃を備えているために下手な行動ができない。だからこそ治安が良いということになると考えられる。そのおかげか、かなり安心して過ごすことができた。

3日目

BUTC 初日の夜は、水のシャワーや停電といったことに悩まされたが、これがフィリピンの地方の状態であるということが理解できて良い経験となった。3日目は企業見学が主な活動であった。まず初めに、地場産業の陶芸品の工場に向かった。そこでは日本にもあるような粘土を使って様々な陶器を作成しており、また、日本の JICA の活動跡を見ることができた。陶芸品は細かい模様をスプーンやフォークといった道具を使って描いているのを見学して単純に素晴らしいと感じた。続いて、ココナッツの繊維を使って商品を作っている工場に見学に向かった。ここでは今まで捨てていたココナッツの殻から繊維を取り出し、それを商品化している場所であって、特に有名なのが繊維で作られた網である。これは工事後の斜面を固定するためのものであって、最終的には分解されてなくなるので環境に優しい画期的なものである。しかし、フィリピンの会社では売れないということでドイツの会社を通じて売っているという。この辺りの経営事情をもっと詳しく知りたいと感じた。

昼食後は湖に向かったが、ここでは景色を堪能しただけだった。その後にピリナッツ工場に

ココナッツの繊維を取り出す場所
(2017年2月14日撮影)



向かい、ピリナッツを割っている現場を見学した。日本ではアーモンドなら身近にあるが、ピリナッツとはあまり関わることはなかったので非常に興味深かった。作業自体は単純であったが、これのおかげで多くの人の生活が成り立っていると考えると何か感慨深いものがある。

ピリナッツ工場見学のあとは教会や展望台といった観光場所を周って3日目は終了した。

4日目

4日目は今までとは違い、キャンパス内で英語の授業を受け、午前中はアクセント、午後は英会話を学んだ。英語の内容自体は中学生レベルのものであったが、自分が今まで使っていた発音や文章が違うものであったことを知り、驚きと共に恥ずかしく感じるものがあった。だが、BUTCの生徒が細かく、分かりやすく教えてくれたこともあってそのようなことはすぐなくなった。

一日みっちり勉強した後はオフィスに集まって全員で料理をした。フィリピン側と日本側に分かれてそれぞれ調理をしたが、お互いに手伝い合い、助け合って調理したものあって充実した時間を過ごすことができた。あちらの学生が作った食べ物はどれも美味しくて日本人の口に合っていた。私たちはお好み焼きとカレーを作ったが、カレーはやや

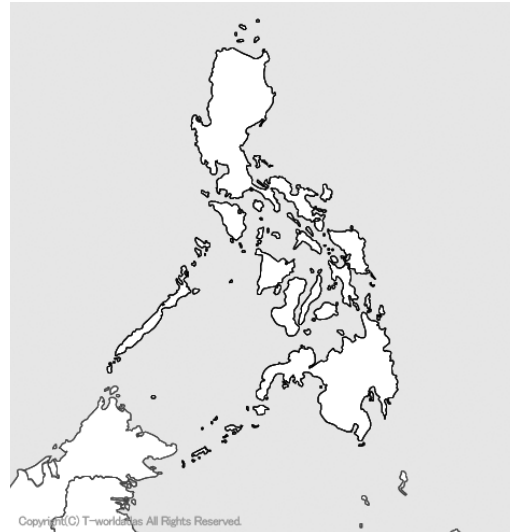


お好み焼きとサラダ (2017年2月15日撮影)

不人気であり、甘口にしたのが誤りであったと私は考える。あちらの人は辛いのが苦手ということもあり、バーモントカレーの甘口を持っていったが、現地ではビコールエクスプレスのような辛い食べ物も多く食べられており、比較的辛い食べ物にも耐性があると思われる。それを事前に知っていたら、中辛～辛口を選択していただろう。カレーの美味しさを理解してはしかったが故にそこが悔しいことであった。

5日目

5日目の主な活動はレクリエーションと日本講座、社会科学見学である。午前中にレクリエーションと日本講座を行った。レクリエーションは何個か行ったが、どれも協力し合ってやるものであって終わった後には私たちの仲はより深くなった。日本講座では、日本語、あっち向いてほい、箸の使い方、折り紙を教えたが、どれも好評でありフィリピンの生徒に日本のことを知ってもらえたと思う。私自身は折り紙を教えることに一抹の不安を感じていたが、フィリピンの生徒が一生懸命覚えようとしてくれたこともあってかスムーズに教えることができた。この経験を経て、外国の人に何かを教えるということの難しさを実感したことと共に、他人に何かを教えるということの面白さを発見できた。



午後は社会科学見学として孤児院と麻薬中毒者のリハビリ施設を訪問した。孤児院では予想以上の子供の多さに驚き、悲しい気持ちになった。中でも父親がいないという男の子が抱っこを求めてきて、しがみつ়く強さが小さい割には非常に強かったのを今でも鮮明に覚えている。このような子供が他にも多く存在しているということを知って胸を打たれた。日本に住んでいるとそのようなことに関わるようなことが一切ないので、孤児院について考え直す良い機会になったと考えている。

もう1つ訪問したのが麻薬中毒者のリハビリ施設であるが、最初に「何も身に付けるな」という注意を聞いてどんな場所かと怖がりながら行った。だが入ってみるとそんなことはなかった。物珍しさにこちらをジロジロと見てくるものの、中には笑顔で挨拶してくれる人も少なくなく、私の考えていたイメージとは違っていた。フィリピンは麻薬という悪から逃れるために全力を尽くしているということを知って、今までの考えを改めるようになるに至ることができた。

6日目

6日目はサンミゲル島に行って島の現状と珊瑚の保全活動について学ぶことが主な内容で



島の子供たち（2017年2月17日撮影）

あった。サンミゲル島は自分がイメージをしていたのと同じ感じであった。台風の痕が現在でも色濃く残っており、政府による改善の手はなかなか伸びてこないということを聞いて、フィリピンという国はまだ開発途上であるということを実感した。島の人々はみんな気さくな人であり、こちらが挨拶をすると笑顔で返してくれる人が大多数を占めていた。特に子供たちが好奇心旺盛で、最初は木の陰からこちらを窺っているだけであったが徐々に近づいてきて、最終的には普通に話すようになった。加えて、船に乗れないというアクシデントにより島を横断することとなったが、結果的に島の人々の暮らしや状態を細かく見ることで良かった。

帰ってきてからは、室内で珊瑚保全に関する講義を受けた。英語の為、聞き取れない箇所はいくつか存在したが大まかな内容は理解することができた。フィリピンは珊瑚の保全に関して非常に強く取り組んでおり、私たち日本人もいくつか見習うところも存在するのではないかと感じ、高知県にも珊瑚は多く生息しているので、これを未来に残すために何かしなければならぬという使命感が芽生えた。

その日の夜はお別れパーティーが開催され、私たちはおおいに楽しんだ。中でもフィリピン名物の「バロット」には驚いた。これは孵化直前の卵を茹でて食べるものであるが、何より割った後の中身がグロテスクなのである。しかし、周りに強く推されて食べさせられたが、意外と美味しく頂くことができた。味を例えるならば、少し臭みのある親子丼であって、私はこれなら平気であった。パーティーの最後の方では互いの別れを惜しみ、泣く人もいたが、そういう私も泣きはしなかったが寂しくなった。彼らとは現在でも SNS で連絡を取り合っているのもうた再会できる予感がある。

7日目

7日目はマニラ市内観光、企業によるフィリピンに関する講義、ショッピングが主な内容である。残念ながら市内観光は雨天によってほとんどできなかった。だからこそ今度は観光目的でフィリピンに行ってみたい。市内を移動する際、バスから降りた時に小さい女の子から物を乞われたことや、雨水を使って体を洗っている子供たちを見て、フィリピンは経済発展に向かっているがこのような一面も持っているということを再認識できた。

午後はフィリピンで働いている三菱自動車マニラの社員からフィリピンの現状を教えて頂いた。フィリピンは車の売上が増加しているのに比べてインフラ整備が間に合っていないことから渋滞が多く発生している、ということに私は一番興味を持ち、他の国ではどうなっているのかを調べたくなった。日本で学ぶのとは違って、現地で住み、働いている人から直接教わるという機会は滅多になく、大統領の評価など中々知ることがないような細かいところを知ることができて良い経験となった。

夕方からは広大な面積を有するショッピングモールでショッピングをしたが、時間が少ない為にお店を1つしか回れなかった。だが、食事を先生方と一緒にさせて頂き、話をするという貴重な機会を得ることができた。

8日目

8日目は日本に移動するだけだったので特に大きな行事はなかったが、日本に帰って来た時

に、トイレが綺麗なことや施設の設備の良さに感動した。

これでスタディツアーの全日程は終了である。

Ⅲ 終わりに

初めてのフィリピン、初めての東南アジアとあって最初は不安と期待で一杯であったが、すぐにそれらはすべて楽しみに変わった。フィリピンという国とそこに住む人々の良さを十分確認すること、加えて課題もしっかりと確認することができて自分の知識を増やし、考えを改めて新しい意見を持つことができるようになった。加えて私たちが住む日本は本当に恵まれていると実感するようになり、現在当たり前のように過ごしている生活をもっと大切にしていきたいと考えるようになった。そして、私の目的である2つは達成できたと言っても過言ではなく、有意義な時間を過ごすことができた。就職して海外赴任する機会が来たら是非、フィリピンで働きたい。

今回このスタディツアーを企画してくださった先生方、本当にお世話になりました。そのことについて感謝すると共に、またご縁があることを心から祈っております。

フィリピンスタディツアーを振り返って

社会経済学科 2 年

稲山 晴花

1 日目

羽田を経由して高知からフィリピンの首都であるマニラまで向かった。マニラに到着してまず車とバイクの多さに驚いた。マニラは想像以上に都会で、大きな建物や建設中のビルなどがバスから見られた。その反面、大通りではホームレスや貧しい子どもがいた。

2 日目 (BUTC 1 日目)

朝早くにマニラ空港からレガスピ空港に移動した。その後、ビコール大学のレガスピキャンパスに移動し、高知大学の学生で現在留学をしている 2 人と交流をした。留学中の経験をたくさん聞くことができ、留学は大学生という今の時期にしかなかなかできないことだから挑戦してみるのもいいのかなと感じた。

レガスピキャンパスに行った後はこれから活動をしていくタバコキャンパスへ向かった。オリエンテーションではビコール大学の学生と初めて会った。マニラからレガスピへ行くと、雰囲気はかなり違うなと思った。レガスピ空港からはマヨン山が見えて車での移動中も田んぼや畑、牛が放牧されているのを見ることができた。とても自然豊かで景観のきれいなところではあるなと感じたが、やはりインフラ整備は十分ではないと感じた。宿泊する大学内のコラボレーションオフィスのシャワーは水のみでお湯は出なかったり、夜になると停電することがたまにあったり、トイレは水が流れない場合は自分で水を注いだり、使ったトイレットペーパーはゴミ箱に捨てる、便座がないなどがあった。フィリピンは日本ほどインフラ整備が進んでいなくて、日本での生活は本当に恵まれているのだなと感じた。

3 日目 (BUTC 2 日目)

この日は企業への訪問をした。まずお皿や花瓶など陶器を作る企業を見学した。私は岡山県出身で岡山には備前焼という工芸があるが、この二つはよく似ているなと思った。次にココナッツの皮を利用した産業の見学をした。ここではココナッツの皮を繊維状になるようほぐし、猫の爪とぎ用のおもちゃや、消臭効果があることから猫のトイレ、ベッドに用いるクッション、がけ崩れを防止するためのネットが作られ、これは植物であるココナッツの皮を用いているため最終的には自然にかえるので環境に優しいものであった。本来は捨てられてしまうはずだったココナッツの皮を有効活用して事業を起こすのはすごいと思った。次にファイバー産業の見学に行った。労働力が安価で手に入るフィリピンらしく、たくさ



んの労働者を雇用し、手編みで製品を作っているのが印象的だった。もし同じ産業を日本でしようとするときと機械で生産するのだろうかと思った。

この日は、企業へ見学に行く合間にレガスピの大きな湖に行ったり、もともとは大きな建物であったがマヨン山の噴火によって下の部分が溶岩で隠れてしまった教会に行ったり、眺めの良い展望台に行ったりした。

4 日目 (BUTC 3 日目)

BUTC での 3 日目は英語の授業がメインであった。午前中は発音の練習で午後は英語で会話をする練習であった。

授業が終わったあとはコラボレーションオフィスに戻り、フィリピンの学生と料理をした。朝、市場に行き、料理に使うための材料を調達しに行った。日本にはないような野菜や、魚を見ることができておもしろかった。買ってきた材料を使って、私たちはカレーとお好み焼きを作った。日本ではカレーとお好み焼きはとてもポピュラーであるが、フィリピンの人達は初めて食べるもの



だったらしく、とても興味を持ってくれた。とくにお好み焼きは好評でソースの味がフィリピンの人たちにもあったようだった。

5 日目 (BUTC 4 日目)

朝早くにフィリピンの学生が来てくれて料理を作ってくれた。その朝ご飯を食べた後は、いくつかのゲームを行い、簡単な日本語の講座であいさつや自分の名前をひらがなで書いてもらった。お箸の使い方や折り紙で鶴の折り方を教えたりもした。

昼食をとった後は、孤児院やリハビリ施設をまわった。夕食はカラオケのあるところでとった。フィリピンの人たちはカラオケがとても好きなようでタガログ語の歌だけでなく英語の歌も歌っていた。

6 日目 (BUTC 最終日)

バスで大学から港まで向かい、小さな船に乗ってサンミゲル島へ向かった。島で村長さんの話を聞いた。少し前に大きな台風が来たらしく、それにより海がしけて魚が全然取れなかったり、植物がだめになったり、家が壊れたりというような被害があったようだ。村長さんの話を聞いた後は、サンゴの保護についての話を聞いた、大きな船が通ったり、人が踏んでしまったりすることにより割れてしまったサンゴを育てるものだ。

これらの後は海で泳いで遊んだ。遠浅の海でどこまで行っても深さが腰ほどしかなく、気候も暖かいので過ごしやすかった。大学に帰ってからは、コラボレーションオフィスでニエベス先生のサンゴについての講義を聞いた。

夕食は、パーティーを準備してくれており、そこでフィリピンの学生と最後の交流をした。プレゼントを準備してくれていたり、一緒に踊ったりできてとても楽しかった。また、ずっと興味を持っていたバロットを食べることができた。

7日目

前日の夜にフィリピンの学生に向けて書いた手紙を渡して、さよならをした。レガスピ空港に行き、マニラ空港へと向かった。レガスピ滞在中はずっと天気があまりよくなく、雲がかかっていてマヨン山の全体を最後まで見るができなかったのが少し残念だった。

マニラにつくと観光をした。どの建物をみても日本とは雰囲気が全然違って、おしゃれに見えた。ショッピングモールではお土産を買ったり、フィリピンはスペインの影響を多く受けていることから、スペイン料理を食べたりした。



観光とショッピングモールの間にフィリピンで働く日本人女性の方のお話を聞くことのできる時間があった。フィリピンの政治や経済などを分かりやすく教えてくださり、日本とは違う文化に興味をもてた。

8日目

マニラ空港から羽田を経由し高知へ戻る。

〈フィリピンスタディツアーで印象に残ったこと〉

・会話について

やはり英語を話す能力は必要だなと感じた。フィリピンの人たちはタガログ語、英語、自分の住む地域の方言の3つの言語を使える人も多いらしい。私も母国語に加えてもう一か国語くらいは使いこなせるようになりたい。フィリピンの人たちはとてもフレンドリーで特に学生たちは私たち日本人学生のつたない英語を一生懸命理解しようとしてくれたのでなんとか会話をすることができたが、英語をもっとうまく使えるようになりたいと思った。ただ、会話中やとっさの質問にテンポよく返答する力は少しついたのではないかと感じた。

また、フィリピンの人たちは話すときに喜びや驚きなど、とても表情が豊かであることが印象に残った。日本人はシャイだとよく言われるが、もっと自分の感情を表に出せてもいいのかなと思った。

・フィリピンの人たち

先ほども言ったがとてもフレンドリーであると感じた。明るい人が多いと感じた。フィ

リピンの人たちは早寝早起きで日本人と比べて2、3時間ぐらい早い生活リズムであると思った。

・食文化の差

一番驚いたのは食事の回数だ。一日5食であり、朝食、間食、昼食、間食、夕食といったようなかんじであった。授業中や人が話をしているときであっても時間になるとそれをいったん中断して食事をするということにも驚いた。

食事は基本的にスプーンとフォークでスプーンをナイフのようにして使う。料理は肉や魚が多めで野菜はあまり出てこなかった。揚げ物や炒め物に油を多くもちいているという印象だった。また、スペイン料理も浸透しているようだった。



フィリピン研修旅行

社会経済学科 2年

中谷 春乃

1日目（2月12日）

高知空港から羽田空港、羽田空港からマニラ空港へ移動の日。フィリピンは蒸し暑いかなと思っていたけれど、涼しい風が吹いて、過ごしやすい気候だった。

2日目（2月13日）

ホテルからマニラ空港まで相乗りの車（ジープニー）が多く、クラクションも多くなっていて、交通状況が日本とは全然違っていることが分かった。ホームレスの子どもたちが路上で寝ているのも見られた。マニラ空港からレガスピ空港へ。マヨン山は天候が悪く、上半分が見えなかった。レガスピに到着した時から、現地のみなさんが笑顔で迎えてくださったので、緊張や不安があったが、"すごく楽しみ"という気持ちになった。ビコール大学レガスピキャンパスで学長さんにご挨拶をした後、高知大からの留学生の方とも交流することが出来て、フィリピンでの生活のことなどを聞くことができ、安心感もあった。

ビコール大学タバコキャンパス（BUTC）の学生さんと初対面。BUTCの学生6名、高知大の学生5名と人数比もよくて、話しやすかった。目が合うと微笑んでくれて、何も話せないでいる自分にいろんな話題を振ってくれた。街の散策をするときも、車に気を付けて肩を抱いて誘導してくれたり、場所の説明を簡単な英語でしてくれたり、とてもフレンドリーで親切にしてもらったので、すぐに緊張もなくなり、打ち解けることができた。レストランでの晩ごはんも、長い時間話をするのができて、急激に仲良くなれたのではないかなと思う。コラボレーションオフィスでは、1日目にシャワーの不具合や停電などが起こって、疲れがたまっているのに、なかなか休めなかった。水のシャワーには心が折れかけたけれど、一緒にツアーに参加しているメンバーと励まし合いながら乗り越えた。今思えば良い経験になったと思う。

3日目（2月14日）

バレンタインデーだったので、BUTCの学生からチョコレートとバラの花をもらった。日本とは違って男性から女性にチョコを渡すということで、プレゼントしてもらい嬉しかった。工場見学へ行く途中、田んぼや畑が多く、日本のように機械が置いてあるのではなく、牛や鶏などがいて昔の日本のように牛が畑を耕すなど何か仕事をしているのかなと考えた。

道路の整備があまりできておらず、狭い道も多くあり、道端に子どももたくさんいたので、交通事故が多く起きそうな環境だと思った。陶器作りの工場では、日本の陶器作りの現場を間近で見たことがなかったので、比べることはできなかったけれど、日本人のデザイナーさんのデザインのものを作ったり、細かい凝ったデザインを切り取っていたり、細かい作業も多くしているのだと驚いた。ココナッツファイバー産業では、日本でも高速道路の土砂崩れ防止などに使われているということで、日本との繋がりがあることが間近に見られて興味深く感じた。

ココナッツの殻という廃棄物が加工されて、ベッドのマットレスに使われていたり、ペット用品になったり、加えて、ココナッツファイバーは土に戻るということで、すごくエコな事業だと思った。

4日目（2月16日）

それぞれの出し物では、BUTCの生徒がみんなの仲が深まるゲームを考えてくれていて、楽しく活動できた。私たちは、ベーシック日本語とあっち向いてホイ、お箸の使い方、折り紙の鶴を教えた。正確に伝わる英語を使うことは難しかったけれど、BUTCの学生たちの反応を見ながらうまく進めることができたのではないと思う。お箸のプレゼントも喜んでくれたのでよかった。

出し物で楽しんだ後は、孤児院に行った。貧しくて食べ物が十分でなかったり、学校へ行けなかったりする状態の中で生活する子どもたちや、虐待をされた子どもたちが生活をする場である。日本では、児童養護施設といわれるところであり、そのような場所の見学はあまりできないと思うので、貴重な経験ができたと思う。私は、子どもの貧困や貧困の連鎖などについても勉強したいと思っているので、日本だけでなく海外にも目を向けて考えてみようと思えるきっかけになった。

麻薬中毒者やアルコール中毒者の更生施設へいった。最初は、荷物をバスに置いておくことや、身に付けているアクセサリーを外すこと、写真をとってはいけない、メモをとってはいけないなどと言われていて危険な施設なのかなと思っていたが、施設内はきれいで、おりがみやバスケットボールをしている人もいて学校のような感じだった。施設が新しく、きれいだったので、スポンサーなどからの支援が多いのかなと感じた。さらに、ミクロ経済学で習った禁制品取引から考えると、麻薬販売者への罰則を科すことと、消費者への啓蒙活動や治療が同じ費用で行われる場合、販売者への罰則を行った時、麻薬の流通は減り、価格は高くなる。消費者への働きかけをした時には麻薬の流通は減り、価格は低くなると考えられる。お金が無くなった麻薬中毒者が麻薬を手に入れるために犯罪に手を染めるケースが多いことが麻薬の大きな問題であると考えられるので、消費者への働きかけの方が有効であると学習した。よってこのような更生施設への支援は大事なことだと思った。どちらも日本では見学するような機会があまりないので、本当にいい経験、勉強になった。

5日目（2月17日）

BUTCから車で5分ほどの港から車でサンミゲル島（SMI）へ。船から降り村長さんにご挨拶へ行った。SMIは島なので少ない人口で生活しているのかと思っていたけれど、人口は多くて、地区が5つぐらいに分かれていることに驚いた。子どもが多く、小学校もあることが分かった。台風の影響を受けてまだ被害が残っており、救援を必要としていたが、島であり、救援にいくことは難しいのだと思った。印象深かったのは、洗濯を手洗いでしていたことだ。タバコには、洗濯機があったし、SMIの村長さんのところにもテレビがあったので、家にも洗濯機はあるのかなと思っていたが、手洗いで行っていることが分かった。

最後のお別れ会では、5日間いつも一緒に過ごしたみんなと別れるのはすごく寂しかった。

バロットは本当に食べたくなかったけど、挑戦できてよかった。

6日目（2月18日）

マニラでは雨であまり長い時間は観光することができなかった。しかし、レガスピ・タバコとマニラの違いがよく分かった。田舎の方が、貧困の人やホームレスの人たちが多いのかなと思っていたが、初日に見た路上で寝ている子どもたちに加えて、この日も、子どもがバスを叩いてきたり、何かを訴えてきたりとマニラにも多くいることが分かった。

倉沢麻紀さんのフィリピンの経済概況と日系企業動向についてのお話はとても勉強になった。フィリピンが現在経済成長している理由は3つあり、1つ目はコールセンターなどのIT－BPO産業が盛んになっていることが分かった。2つ目は、20歳未満人口が30%以上もいるということで、生産年齢人口が多く、豊富な労働力を持っているので、経済成長しているということだ。そして、その人口ボーナスは2050年以降も続いていくとされる。3つ目は、海外出稼ぎ労働者の送金が個人消費を支えていることだ。能力が高ければ、ナースなどとしてアメリカやカナダへ、低能力では、メイドや船員として働くなどさまざまな国に出稼ぎに行き、そのお金をフィリピンに送ることで、フィリピンでの個人消費がなされることが経済成長している理由と考えられる。その中で挙げられている問題点はインフラの未整備である。空港や港湾、道路などの渋滞や、アジアで最も高い水準の電力料金が問題になっている。それには政策実行能力の低さが要因の一つとなっていて、現在のドゥテルテ大統領は特に貧困層からの高い支持を受け、期待されていることが分かった。加えて、フィリピンは電気代が高く、島国であるので、加工して輸出するようなことは難しく、今は、内需に応えるような産業が必要であることが分かった。

まとめ

フィリピンでの7日間は初めての経験ばかりで、充実していた。フィリピンの人たちはいつも笑顔がすてきで、私たちのわがままを快く聞いてくれるような親切な人ばかりで一生忘れられない思い出と友達ができた。観光だけでなく、都市から離れて工場見学や生活をすることができたので、フィリピンの経済状況、日本との違いがよく分かる良い経験となった。

フィリピンスタディツアーを振り返って — 8日間の体験から得たもの —

人文学部社会経済学科2年

横関 彩加

今回、このスタディツアーに参加するにあたって、普通の留学や旅行では得ることが出来ない大切なものを得ることができた。特に、5日間、現地の選ばれた生徒と密着して行動することでとても深い交流ができた。7泊8日の学習では、日本とはかけ離れた生活をしていて驚いたこと、慣れないこと、難しいことがたくさんあった。フィリピンに行く前はずっと英語の勉強が出来ていないことへの不安、少人数で行くことへの不安など、楽しみはほとんどなく、心配ばかりであった。

1日目は移動日で龍馬空港から羽田空港へ行き、マニラについてホテルに直行し、夕飯を食べ、消灯した。羽田空港へ行くとたくさんの旅行客がいて、その中でも卒業旅行へ行く人が目立っていた。目的地は違うけど楽しみは同じであるため、緊張感が高まった。昼食をとっている時に体調が悪かったため、心配であった。フィリピンに行く人が非常に多く、どのような目的を持って行くのかが気になった。いざ飛行機に乗ると寒くてタオルをもらっても凍えていた。機内食は意外と美味しかったが、冷凍食品かなと思えるものもあった。機内食やジュースを頼む時に英語で会話した時、初めての体験で緊張した。約4時間の長旅であったため、自己紹介文を覚えることや、英語の勉強をした。いざフィリピンに着くと思ったより暑くはなく、海外に来たという感覚もあまりなかった。ここで難しいと思ったのは両替である。渡したお金と同じ値段が返って来ているかを数えることは練習していないと出来ないと感じた。マニラの夜の街を車の中で見ると、日本にもあるような様々な建物があつた。フィリピンも都会は発展していることが分かった。夜ご飯は海老マヨを食べたが、日本の海老マヨとはかけ離れていた。また、スイカのジュースは甘く、体調も悪かったため、美味しいとは思えなかった。ご飯とジュースが同じくらいの値段でとても驚いた。コンビニでお菓子を買う時、お金を初めて使って緊張した。店員さんは優しく、日本の言葉をいくつか話してくれた。ホテルは思っていたほど暑くなく、半袖半ズボンでは眠れなかった。この時はまだこれから始まる旅に対して不安しかなかった。また体調が何よりの心配であった。

2日目は朝5時10分に起床したがとても睡眠不足であった。早朝から空港でご飯を食べ、マニラ空港から飛行機に乗り、レガスピへ向かう予定。マニラの空港までの間、ホームレスが道にたくさんいた。地面も汚いのになにを敷いて子供も寝ていた。私たちはこうして同じ時間を過ごしているのにあのホームレス達は何を考へながら生きているのか疑問に思った。機内でハンバーガーが出たが食べる元気はなかった。レガスピに着くと田舎の風景で驚いた。まずはビコール大学のレガスピキャンパスへ行き、学長さんに挨拶をし、日本人留学生と合流した。その時にカトさんとも出会った。お昼ご飯を食べに行ったが、辛いものがたくさんあり、またハロハロというかき氷のような食べ物も食べた。とても寒かった。日本人留学生によると、留学をすれば日本のものがとても恋しく、おにぎりが食べたいと言っていた。また、日本人がクラ

スに1人であるため、浮いてしまうと言うことを言っていた。それを聞いて留学をすることはやめておこうと感じた。日本人留学生を見送ったあと、車で1時間40分ほどの道のりを経て、いよいよタバコキャンパスへ。まず、最初にコンビニなどを案内してもらい、泊まる場所へ行き、その後にオリエンテーションでこれからお世話になる6人の生徒と交流をした。生徒会長で背の高いリエイジャン、背は小さいけどとっても優しそうで首席のジェイアール、笑顔が印象的なチャルロット、面白くてよく喋るジェーン、細くてしっかりしていて女の子らしいジョアン、可愛くてお姉さんみたいなラブリーと出会った。その後に市役所へ行き、みんなでゲームセンターやご飯を食べに行った。私はその時にラブリーと仲良くなった。ラブリーは顔立ちが非常に可愛く、年は2歳下であるが、お姉さんのようなオーラがあった。片言の英語を真剣に聞き取ってくれ、お互いの携帯の中の写真を見せ合って話をした。とてもよい時間であった。その後にコンビニへ行き、朝ごはんを買い、部屋へ戻った。部屋のシャワーは水で、風邪をひいていたので髪だけ洗い、アルコールのウェットティッシュで体を拭いた。床に二枚マットをひいて寝るという潔癖症の私にはあり得ないベッドで寝ることになった。

3日目は昨日までの頭痛と寒気は治ったものの、喉がとても痛かった。今日はバレンタインデーで、リエイジャンとジェイアールからプレゼントをもらった。チョコレートとバラのプレゼントで、バラはみんな初めてもらったため、非常に喜んだ。車でずっと長い道のりを行った。道中にある田んぼや建物をみんなが紹介してくれた。それからまず始めに焼き物の工場へ行った。リッキーが皿作りに挑戦し、とても綺麗に出来ていたが、大きさが微妙で何を入れようか迷っていた。ツボや、コップなどたくさんの焼き物があった。キーホルダーもあり、ミニオンやキティーなど日本でもなじみのあるキャラクターもいっぱいあった。次にココナッツ産業へ行った。匂いが独特であった。猫じゃらしや、猫用のグッズ、バックになる元のものがあった。ここでタガログ語をたくさん教えてもらい、みんなと打ち解けられたような気がした。昼ごはんが日本食で、ちょっとホッとした。マンゴーが食べられなかったのが残念であった。次にファイバー産業のところへ行った。ファイバー産業では木を研ぐ体験をさせてもらった。また、編み物をさせてもらった。この人たちもすごく頑張って毎日働いているのだろうと思った。私は日本で冷房にあたりながら授業を受けるし、仕事だって外へ出ることなどほとんどないと思う。何不自由なく、普通にお金をもらって生活しているが、そこの人たちはみんな苦労して暑い中働いて、少しのお金でやりくりして生活していると思うと、言葉が出なかった。次に湖へ行った。雨が降っていた。観光客に韓国人と間違われた。ヨットに乗れるはずだったが、人が多すぎたので乗れなかった。今日はバレンタインデーでハートの形のところがあり、ジェイアールと写真を撮ったら嫌そうだった。そしてピリナッツ工場へ行った。ピリナッツの種を1つ1つ剥いている人達にあった。この人たちもこれで生計を立てているのかと思うと大丈夫かと感じた。色んなピリナッツの味見をしたが辛いものが多かった。お土産にも買ったり、いただいたりした。その後、教会へいった。この教会はマヨン山の噴火で埋まってしまい、鐘を鳴らすところだけ生き残っていたが原爆ドームのようになっていた。とっても大きな教会だったそうで、火山灰で埋まってしまったことは信じられなかった。みんなでいい写真を一列になって撮った。その後に少し時間をかけて展望台へ行った。その展望台はとても景色が綺麗であった。アイスと水をもらった。リッキーとそうやさんは有名なアイスに挑戦していたがとても辛かつ

た。ラブリーとたくさん写真を撮ることができた。そのあとはレストランへ行った。これもまた水が1つ足りないという事件があった。色んな食べ物が出てきた。特にスープは独特であった。そのあとはコラボレーションルームに帰り、またあの水風呂に入り、マスクをして寝た。

4日目は喉の痛みはなくなっていたが、咳がすごく出た。今日は朝から先生の授業があった。しかし、先生が遅れたため、みんなで校内を回った。黒板があって懐かしかった。ノートと鉛筆で勉強しており、高校の授業を思い出した。教室いっぱいになって授業を行っていた。貼り紙が貼られていて、よく見るとジェイアールがいた。頭が相当いいのだと感じた。ポテトを食べた。明太マヨみみたいなソースがかかっているとても美味しかった。そのあとは買い物へ行った。市場へ行くと独特な匂いがして、色んな物がおいてあった。日本にあるものも普通に置いてあって驚いた。英語での説明をみんながしてくれるので私は日本語ではこう言うということをおみんなに教えてあげた。小麦粉も様々な種類があって選ぶことが難しかった。市場を見学したら帰った。先生が来てからみんなで勉強をした。ジェイアールが寝坊して来た。彼は寝坊して、市場へ行ってみんなを探したが、見つからなかったのもそのまま学校へ来たということを知って爆笑した。フィリピン人はのんびりしているのだと感じた。全員揃ったところで、まずは発音の練習から行い、そのあと、色んな言葉が書いてある紙を順番に貼り付けて読む練習をした。おやつに焼きそばが出たことには驚いた。私たちは三食しか食べないが、フィリピンの人は五食ということに驚いた。ラブリーやジョアンは細いのにいっぱい食べていてすごいと思った。昼ごはんはジョリビーへ行った。その時にあの自転車に初めて乗った。二人乗りで窮屈であった。昼ごはんを食べている時に、カトさんと話が通じなさすぎてみんなが大爆笑した。英語が通じなくてもジェスチャーやアイコンタクト、そして何より笑いでみんなを幸せにすることが分かった。みんな楽しそうでも私も楽しかった。夜はみんなでご飯を作るため、買い出しに行った。そこでまたカトさんと話が通じず、カトさんが足を買うことだろうかと言いだしてまた大爆笑した。買い物では日本の物を買うために伝えることが非常に難しかった。お金の出し方はなんとなくわかって来たが、会話はまだまだであると感じた。また、あの自転車に乗って学校まで帰った。そしてまた講義室で会話の練習をした。私はラブリーとペアを組んだ。その時に日本語も取り入れると言うことで、「よ！」と「さよなら」を取り入れた。また、タガログ語の「サラーマ」も取り入れた。ラブリーが意味も分からず「よ！」と言う姿は面白く、可愛かった。それが終わるとみんなで料理をした。フィリピンの料理も美味しそうであった。私たちはお好み焼きとカレーを作った。作るのに大体4時間くらいかかって驚いた。作っている時にビデオを回してみんなで歌った。こういう交流は非常に大事であると心から感じた。とても楽しい時間であった。日本人は箸を使って食べるため、みんなに箸の使い方を教えてあげた。リエイジャンがとてもうまくて驚いた。みんなお好み焼きは美味しいと食べていたが、カレーはイマイチであった。食べ終わったあとはみんなで変顔をして遊んだ。とても楽しかった。あと、いろんな動画を撮ったり、写真を撮ったりと充実した時間を過ごせた。片付けをしている時に明日は時間を遅らせることになったが、リエイジャンが急に明日は7時30分に来ると言いだして全力で止めたが結局朝ごはんを7時半に作りに来ることになった。彼の家はどれだけ近いのだろうかと感じた。

5日目は今日も咳がとて出た。ぐっすり寝ていると時間通りにリエイジャンが現れた。昨

日寝坊をしたジェイアールも一緒に来た。爆睡していたので驚いた。2人ともとても明るく来た。7時半からご飯を作り、8時半に作り終わってみんなで朝ごはんを食べた。9時ごろに先生が来てもまだ食べていて全員で遅刻をした。ゆっくりと一番最初のオリエンテーションをした部屋へ行くと、新しい学生が何人かいた。レクリエーションの準備をしてくれていた。そこで3日目にするはずであったレクリエーションをした。まず始めはフィリピンの人達が考えてくれたレクリエーションをした。まずは2チームに分かれて輪ゴムに糸を通して紙コップを1つ1つピラミッドにしていく遊びをした。みんなの力の協力が必要であったがそんなに難しくはないと感じた。次にマシュマロをストローで吸ってそれを向こうの紙コップに入れるというリレー形式のゲームをした。私は陸上部なので有利と言ってくれたが正直何にも有利でないと思った。しかもマシュマロを落としてそれを入れると言う反則をしてしまった。ジョアンが苦手で全くすえていなくてリッキーが大爆笑していた。結局、私たちのチームは負けてしまった。次のゲームは日本人がカードを見てモノマネをしてフィリピンの人が当てるゲームをした。劇的な演技力が必要であったがほろ負けをしてしまった。もっと迫力のある演技をすればよかったと思った。次に目隠しをしてチームごとに列車を作り、一番後ろの人だけが目を開けて肩や頭を叩いて地面に落ちているコップを取るように指示し、多くのコップを取れた方の勝ちというゲームをした。私は一番後ろの指示をする役をした。みんなにうまく指示をすることができなくて、とても大笑いした。みんなに反応が伝わるのが遅いということが分かった。結局、私のチームが勝ち、優勝をもらった。次に私たち日本人が日本の言葉や箸の使い方、折り紙の折り方を教えた。私はじゃんけんで「あっちむいてほい」をやった。教える側なので生徒一人一人に理解をしてもらい、分からない人には私がつくようにし、教えた。みんな理解が早く、挑戦者と対決することにした。私はとても強いと言いながら、挑戦者であるリエイジェンと戦い、じゃんけんに全く勝てず、結局負けてしまった。箸の使い方では、みんなうまく使えていて驚いた。ここでもまたランチのおやつが出て、ドーナツを食べた。そして最後に折り紙を教えた。鶴を作った。ジェーンは少し違うパターンの物になっていたが、他の人はとても上手くできていた。そのあとはみんなで昼ご飯を食べて、バスに乗って展望台のようなところへ行き、マヨン山の噴火のDVDを見た。このときとても咳が出てしんどかった。そのあとに、孤児院へ行った。チャルロットは「こんなに可愛いのに・・・」と涙を流していた。まだ幼い子供たちはなぜここに来たのか、親はどこにいるのかわからないと思うと何とも言えない気持ちになった。次にリハビリ施設へ行った。入れ墨をしている人がほとんどであった。たくさんの方が家を建てていた。みんなどのような経緯でこの施設にくるようになったのか気になった。また、私たちのことが来た時にどのようなことを思ったのかも気になった。リハビリ施設を後にすると車でずっと移動し、着いたところはカラオケだった。生徒以上に先生が疲れていた。なぜこんなところでご飯を食べるのが不思議であった。その時、みんなが今日はコラボレーションルームで泊まるということを初めて知り、驚いた。結局、日本人の要望で別の部屋に泊まってもらった。お風呂に入った時、やっぱり水風呂は無理だと思った。

6日目は島へ行く日であった。朝ご飯を食べて、雨の中、船の場所まで移動し、そこから船で約30分波に揺られて島へ渡った。船から降りる時、とても恐怖であった。島につくとゴミが非常に多く、ここで暮らすことは厳しいと感じた。村長さんのオフィスへ行くと、とても奇

麗なところで驚いた。漁業で生計を立てていると言っていたが、台風などの影響はとても大きいものであると思った。様々な匂いがしていて、犬も見ただことないような種類がたくさんいた。リエイジェンはサンダルを流されてと言って裸足で歩いていたが、ケガが心配なのと、私はそのようなことはできないと心から思った。海に入ると、とてもしょっぱい味がした。最初は寒かったが、だんだん慣れると海の方が温かった。シュノーケリングというよりも、ただ海に入っただけであった。そのあとは30分かけて歩いた。周りを見ると、この島の暮らしがよく分かった。衛生的に悪いようなところで住んでいると思った。小さな家に何人もの子供が住んでおり、小学校もあったが、あまりきれいであるとは言えなかった。この島で日本のことを知っている人、飛行機という乗り物を知っている人はどれくらいいるのだろうかと考えた。島から帰ると、少し休憩があつてから、サンゴの保全活動の講義を聞いた。実際に体験もさせてもらったが、先生の研究はフィリピンだからこそできるものであると考えた。2時間ほど休憩をした後に、ホールに呼ばれたため、行ってみると、豪華な椅子やご飯が用意されており、コラボレーションルームに戻り、着替えてから再び、戻ってきた。すると、フィリピンの生徒たちの司会でお別れ会がスタートした。まずプレゼントをもらい、一人ひとり挨拶をした。そのあとに、“Welcome to the family”をリエイジェンの指揮でみんなと一緒に手話をしながら歌った。その時に、このスタディツアーに参加し、色んな事があつたけど、ここに来て本当に良かったと感じた。もうこの人たちともお別れなのだと思うと、とても悲しくなった。それからご飯を食べているとみんなが泣き出し、円陣を組んだ。先生方にもお礼を言い、思う存分踊った。そして、ふ化しかけの卵を食べた。そして、全員に明日会いに来てねと伝えた。そしてみんなが帰った後、日本人は寝不足で手紙を書いた。

7日目は睡眠時間3時間ほどで片付けや準備をした。8時ごろになんと全員がお見送りに来てくれた。昨日大泣きをしていたジェイアールは今日も泣いていた。車に乗ってみんなとお別れするときにはとても寂しかった。そのあとは空港へ行き、飛行機に乗ってマニラへと帰った。昼ごはんはマクドナルドで買うという体験をしたが、なかなか伝えることが難しかった。そのあとは、世界遺産や教会へ行った。教会では徳川家康などが飾られており、とても懐かしかった。バスを降りると、お金を欲しがる子供や傘を売る人達、地べたに座って景色を眺めるホームレスがたくさんいて驚いた。3時から倉沢麻紀さんのお話を聞いた。フィリピンの経済のことや日系企業の動向についてのお話であった。フィリピンでは経済が向上しているということなので、日本と競り合う日が来るかもしれないと考えた。倉沢さんはフィリピンに留学し、この国が好きになり、ここで働いているとおっしゃっていたが、とても素敵なお話であると感じた。自分の人生を変える何かを得ることは大切であり、私もそのような出来事に出会いたいと考えた。そのあとは、ショッピングモールへ行き、二時間買い物をした。しかし、ここで失敗したが、色んな所を見ていて、時間がなく、結局お土産を買う時間が15分しかなかったことだ。先に買うものは買っておくべきだということを学んだ。ご飯はおいしかったが、時間がなくてあまり食べられなかった。そして、一日目と同じホテルへ。やっと帰ってきたという安心感と、明日帰るのかという寂しさとが入り混じった夜であった。

8日目の最終日は朝5時30分に起き、6時30分にホテルを出て、空港へ向かった。朝からみんな元気であった。空港で一時間くらい自由に買い物をし、飛行機でフィリピンを後にした。

飛行機では隣の人と写真を撮った。みんな離れたところに乗っており、特に私は誰もいなかったため、ずっと思い出を振り返りながら眠った。2時に羽田につき、少し自由時間でアイスを食べ、少し早く搭乗口へ行き、待機していた。4時55分に羽田を旅立ち、6時半に高知へ帰ってきて、スタディツアーが終了した。

このスタディツアーに参加させていただいて得たことは、日本にいただけではわからない、世界のほんの一部ではあるが、状況を知ることができたことである。私たちは普段、靴を脱いで部屋に入り、お風呂につかり、好きなだけテレビを見て、温かい布団で寝ている。しかし、フィリピンは日本より普及が遅く、給料も低いため、日本よりはるかに貧しい生活をしている。ビコール大学に通う学生はあまり感じなかったが、島の人やホームレスの人たちを見ると私たちの生活とはかけ離れた生活をしており、とても驚いた。そして、何より感じたことは運営してくれる人々の大切さである。私たちがたくさんの場所へ行き、見聞をたくさんできて日本にいれば経験できないことが多くできたのは、スタッフの方々のおかげである。留学や普通の旅行では決して体験することは出来ないことばかりであった。それは、工場に連絡を取ってくれる人や、運転をしてその場所まで連れて行ってくれる人、危なくないように場所ごとに変えながらついてきてくれるスタッフの人がいてくれたからである。また、見学を許して下さった工場の方々や、孤児院の方、リハビリ施設の方、島の人、休日にも関わらず、講演をしてくださった倉沢さんなど、たくさんの方々の支援があって私たちにとってかけがえのない講義となった。また、初日や最終日に会を開くために会場をセッティングしてくださったビコール大学の先生や、司会進行をしてくださった学生たちにも感謝しなければならない。カメラマンのアランさんや、わがままを聞き続けてくれ、一人ひとりの体調面をずっと気にかけてくれたカトさんはずっとついていてくれた。心から感謝しなければならない。また、私たち学生のために下見をしてくださったり、毎週時間を割いて講義をして下さったり、突然にも関わらず、このツアーに参加してくださったり、現地では私たちが楽しめるように多少の限度は超えても許して下さったり、たくさんのサポートをしてくださった先生方がいたからこそ、誰一人けがをせず、休むことなく、物を盗まれることもなく、無事に旅行を終えることができた。そして、一生の友達であってほしいと思える大好きな6人のビコール大学の選ばれし学生たちに感謝しなければならない。片言の英語を真剣に聞き取ってくれ、いつも笑顔で私たちの体調を気にかけてくれ、優しく、楽しく、二度と忘れることのできない思い出を共に作ってくれた。別れの時、みんなで涙を流したのはお互いに大好きであると思えたからであると感じた。それほどよい日々を送れたと感じる。そして、このスタディツアーの参加を許してくれ、費用を出してくれた親に感謝しなければならない。このスタディツアーに参加して、数え切れないほどのよい体験をし、失敗や困ったこともたくさんあったが、すべてが自分を成長させてくれた。また、たくさんの素晴らしい人々との出会いもあり、参加して心から良かったと感じた。普通の講義とは価値の重みが違うと考えた。何より、数え切れない人の支えがあるからこそ、良い経験ができていたということを学んだ。将来、自分もこのように人のために支えとなる仕事をしたいと考えるようになった。

Philippines Study Tour (2017 年 2 月 12 日～ 19 日)

人文社会科学科 社会科学コース 1 年

花田 利騎

1 日目

この日私が学んだことは何事にも準備がとても大切であるということである。この日だけで 2 回も準備不足を痛感した。1 回目はフィリピンに持っていくために分けていた資料類を全て家に忘れてきたことである。幸いにもフィリピンに行っている間は怪我や病気にかかることなく、無事に終了したため大丈夫であったが、もし病気にかかっていたら、保険の確認をするために日本にわざわざ連絡をするなど多くの手間がかかっていただろう。2 回目はマニラに行く飛行機の中で、税関の書類やパスポートなど全て上に置いてしまって、隣の人に聞いたりして、迷惑をかけてしまった。これらのことから、準備が重要であることを再認識された。

2 日目

この日学んだことはヒアリングよりもスピーキングの方が大切であるということだ。ヒアリングも重要であるのだが、初めてフィリピンの学生と話したとき、自分の思っていることや自ら話すことが少なく、フィリピンの学生が主導的に自己紹介などをした記憶がある。私はこの日気を遣いすぎていたと思う。人見知りではないと思うが、どのようにして対応するのがベストかを練っていた。また、声をかけるタイミングやどんな言葉をかけたらいいのか、多くのことを考えすぎていたように感じる。フィリピンの学生のように興味本位で多くの日本のことを聞いてくるように私もフィリピンのことについて聞きたかったが、自分の語学力もあり、聞くことには至らなかった。ヒアリングでは分からないこともあったが、分かる単語を拾って、なんとなく返事していたが、自分の今の気持ちを伝えることはできず、4 日目くらいから少しずつ話せるようになってきたかな？というくらいであった。日本でより勉強していたとしても、やはり実践的な練習はできないので、今回と同様なかたちになっていただろうと思った。

また、この日はフィリピンの暮らしについても多く思うことがあった。車道に信号がないことが一番驚いた。警察官や警備員が手信号によって歩行者の整理をしている姿を見て、やはりインフラの整備はまだまだ進んでいないと実感できた。その他にも道路のボコボコさやシャワーが水だけであることを考えれば、日本はどれだけ恵まれているのかを実感することができた。

3 日目

多くの産業見学の中で私はファイバー産業が一番おもしろかった。バナナの葉、アバカの繊維からカゴ、イス、机などの家具といったものが作られていることに驚きつつ、すべての工程が手作業をメインでやっているところがすごいと感じた。すべての工程を見学できたうえにやらせてもらえることができ、実際に触れることで、1 つ 1 つの工程の難しさなどを実感できた。現在の日本でこの工程を行うとすれば、全て機械でやっても過言でないと思った。また、

今回は乗れなかったが、湖の上でこの工場で製造されているイスに座りながら自然を見渡したかった。

4日目

この日の講義で英語のアクセントについて学ぶことができた。母音の数が5つであることは同じであるが、発音する際には11種類に分かれており、時間をかけて、1つ1つのアクセントの違いを分かりやすく教えていただいた。また、日本人には難しいthのアクセントも教えていただいた。この講義後から話すときには少し意識して話すことができた。アクセントは今までローマ字を日本語読みしていた感じで高校の時の教科書を読んでいたが、もし今読むとすれば、少しネイティブ寄りの発音ができるのではないかと思った。アクセントが良ければ、伝わりづらかった単語も今まで以上に伝わることができ、話すことがより好きになると感じた。

5日目

この日は麻薬中毒、アルコール依存症のリハビリ施設に行った。近頃の日本のニュースで、フィリピンの大統領が禁止薬物を使用した人を殺すように指示したというニュースを見て、とても危険な国であるイメージを少しは持って行ったために、リハビリ施設もとても危ないようなところであると思っていた。住宅街の奥の壁に囲まれた施設で、どのようなところなのか入る前から怖かった。入ってからは壁の外の住人よりもきれいなところで暮らしているのではと感じた。この施設で暮らしている人たちから危険な感じを受けることができず、“Hello”と普通に話してくれる人たちもいた。なぜ、この人たちが薬物などに手を出してしまったのだろうと考えてもそのときは分からなかった。また、この施設には女性職員も多く見うけられた。女性の方があれだけ多く働いているところを大学以外で見ていなかったのも、こういう仕事場もあるのだなと思った。

6日目

サンミゲル島では12月の台風で被害を被ったままで援助が来ない実態があることが分かった。屋根が飛ばされ、ココナッツの葉っぱが屋根の代わりになっていたり、船が壊れて使えなかったり、電気が未だに使えなかったりなど被害を間近に見られたところは被害の規模や、本当に援助が来ないことを感じ取れることができた。その中でもサンゴの保全に力を入れていることが分かった。針金でロープにサンゴをくくって強い波が来ても耐えられるようにしていた。その作業を小学生も手伝って行っていることから、島全体で力を入れている活動であると思った。また、島を歩いている中で子どもの数が非常に多いことが分かった。小学校も何校かあるため、教育的には大丈夫ではあるが、やはり病院などないため何かあれば、すぐにルソン島まで行かなければいけないというのが現状であった。やはり環境的な要因が生活に支障をきたし、それを全て受け入れなければならない。島国ならではの光景であると感じた。

7日目

この日はフィリピンの経済概況について学んだ。現在、フィリピンの人口は増えており、

2050 年以降も人口ボーナスは続く。GDP 成長率は 2016 年で 6.8% 成長し、周辺のアジア諸国では 1 番の成長率である。要因としては IT-BPO 産業の成長、豊富な労働力、海外出稼ぎ労働者の送金が個人消費を支えていることが挙げられる。現在のフィリピンでは日本食ブームであり、レストランやコンビニの進出が見られる。このコンビニなどはフランチャイズで行われている。投資環境のメリットとしては人件費の安さ、国民性、英語人材の豊富さがあり、課題としてはインフラの未整備が一番である。インフラを整備できない理由に税金を集めることができていないことがある。賄賂や横流し、密輸の取り締まりの甘さが税金を徴収できていない理由である。また、公務員の収入が低いため、なりたいと考えている人が少ない。現在の大統領は外交面、禁止薬物に対しては発言がすぐに問題になる場合があるが、それ以外のことで的を射た政策を掲げているため国民の支持が高いことが分かった。私はこれからのフィリピンが、4 年間でどういう政策を行っていくかを見てきたいと考えている。フィリピン史上最大の転換期になると私は思う。

8 日目は初日と同じ移動日のため省略。

まとめ

このフィリピンスタディーツアーを通して思ったことはインフラが整っているから幸せで、インフラが整っていないから不幸であるということは正しいのかということである。私は正直、シャワーは水であったり、トイレトペーパーをトイレで流せなかったりするのはいかかわりそうであると思ってしまった。また、サンミゲル島で電気が使えないところや、屋根がココナッツの葉っぱであることは不便だろうなと思ってしまった。しかし、サンミゲル島の子どもたちの笑顔、孤児院の子どもたちの笑顔は日本で暮らす私たちの笑顔と差が無く、自分たちが暮らしている現在の生活に満足しているように思えた。それに加えて、マニラでバスの中にいるとき、雨が降っているにもかかわらず、タンクトップ、ハーフパンツ、裸足でペットボトルを持ってお金をくれと言ってきた 5, 6 歳の子どもたちの顔を今でも忘れることができない。彼らにとっての 1 日生き延びるための 1 ペソが今の私のどれくらいの価値と置き換えられるか想像もできない。このようなことを考えていると、日本人は恵まれてはいるが、幸福度でいうとフィリピンに負けているのではないかと感じた。フィリピンの学生と接していても、いつも笑顔で過ごし、不平、不満を言っている私たちより人としての器も大きく、人間性と呼ばれるものに欠けるところがないなと感じた。私は最近の生活でシャワーから温かい水が出る、いつも財布にいくらかのお金が入っていることに対して、特別な意識をするようになったと思う。1 つ 1 つの行動に対して考えられるものがあり、ありがたみをより感じるようになった。まだ、将来の夢は決まっていないが、発展途上国と呼ばれる国の貧困問題についても少しは考えていきたいと思った。そのためにも、普段の生活から見直し、多角的に貧困や経済発展について学んでいきたいと思う。

7 実施の経緯

2006 年（平成 18 年）3 月 31 日に、高知大学黒潮圏総合科学専攻がビコール大学と、協定締結（学術 交流及び学生交流）し、交流を継続している。

人文学部の教育を担当する黒潮圏総合科学専攻の教員からスタディツアーの実施企画がもちあがり、全学改組に際し 2015 年度に教育機能強化経費予算を活用し、2015 年 11 月に現地調査のため、人文学部から、3 名（中川・新保・堀）がツアープログラムについてのビコール大学と打ち合わせ、ツアー・コースの実地調査を行う。

8 事前準備

2016 年 2 月 ツアー実施の日程決定

7 月 第 1 回説明会&募集

10 月 第 2 回説明会&募集

10 月中旬 5 名の学生参加が確定 事前学習の開始

同時期から実施に向け、本格的に、ビコール大学との連絡を取り始め、旅行会社、マニラセミナーの件で JETRO 高知、元 JETRO 職員と連絡を取る。

9 総括

本スタディツアーは概ね計画通り進行し、目的である国際社会についての学習と、学生間の国際交流において期待以上の成果があがったといえる。

10 年以上にわたり黒潮圏総合科学専攻の教員が、ビコール大学タバコキャンパスとの交流で育んできた大学間の良好な関係がベースにあったことにより、ビコール大学から、今回の学生の受け入れ体制と、ツアーの企画と実施に全面的な協力が得られた。

ビコール大学側では、多くの教員がチームになりプログラムの企画実施に取り組み、大学キャンパス滞在中の学生ケアとツアー運営に、教員のみならず、教員以外のスタッフを加えた充実した体制（学生の世話、大学周辺のガイド、自動車運転、写真撮影）を整え、高知大学の学生を迎えてくれた。

その上、ビコール大学の予算で、レクチャー、自動車で移動の際の交通費、食費（夜 2 食分以外は全て）が用意された。また、宿泊は黒潮圏総合科学専攻のビコール大学内の研究拠点の施設を利用したため、学生は安価で宿泊できた（予算を大幅に下回った旅費は帰国後に学生に返金）。滞在中、トイレ、シャワー、洗濯機の故障に見舞われるなどしたが、学生はマットレスの寝にくさにも耐え（慣れ）、学生にとり得難い体験であったと思う。このような高知大学側の日本人学生の耐性、適応力の高さ、チャレンジ精神も今回のツアーの成功要因である。

本ツアーに参加した学生はビコール大学滞在中のプログラムと、JETRO 高知に紹介を

受けた三菱自動車マニラ勤務の職員の方によるセミナーにより、フィリピン社会について多様な学習をした。

なかでも、フィリピン人学生との友好は高知大学の学生に強烈な印象と感動を与えることとなった。ビコール大学側は、日本人学生5名に対し、朝から晩まで1対1で交流する学生を6名を選抜（学生会長、成績優秀者など選抜理由は多様）し、チームで交流する体制を整えてくれていた。その学生たちのホスピタリティの高さと、日本人学生の社交性がマッチし充実した交流ができた。帰国後の現在も SNS での交流が続いている。

また、引率の教員側では、直前まで学生を熱心に指導し旅行手配にあたってきた引率予定者が急遽同行できないという事態も起きたが、ピンチヒッターとして参加した教員が学生活動をサポートし、学生は安心して順調に現地実習ができた。

本ツアー実施にあたり、多くの皆様にご協力いただいたことを担当教員一同感謝申し上げます。

中川 香代、新保 輝幸、堀 美菜、野崎 華世

「国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ」 —— ローンボウルズとグローバル・ヒストリー —— 実施報告

ダレン・リングリィ

川本 真浩（人文科学コース）

◇授業の趣旨

ローンボウルズは、イギリス及びコモンウェルス（英連邦）諸国・諸地域を中心におこなわれているスポーツである。そのルーツを16世紀のイギリスにたどることができるローンボウルズは、19世紀半ば以降イギリスの「ソフトパワー」（そのひとつとして、文化的影響力）がグローバルに波及するなかで、植民地をはじめとする世界各地に広まった。しかし、その伝播のありようは必ずしも一様ではなく、受け手／担い手の文化的特性や各地の社会構造などにより、さまざまな受容／排除／変容／無関心のありかたがみとれる。

当授業では、グローバル・ヒストリー（歴史学・近現代史）と異文化間コミュニケーション論の基礎的知識を習得しつつ、ローンボウルズの実技練習をおこなったうえで、香港を訪ねて、歴史・文化施設・町並みを訪問・見学し、ローンボウルズを通じて現地の人びとと交流する。同地の歴史的特性と多文化社会のありようを知識と実体験の両方で受けとめ考えさせることにより、受講学生に「学び」の次なるステップに進む手がかりを把握させることを目指す。

◇授業計画（費用は受講生募集時の概算）

- * 科目名：国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ
- * 副題：ローンボウルズとグローバル・ヒストリー
- * 受講学生：主に1年生及び2年生の履修を想定しているが、3年生以上も履修可能
（ただし2017年3月卒業見込みの者は履修不可）
- * 該当プログラム：総合文化プログラム、アジア・オセアニア地域プログラム
- * 訪問地：中華人民共和国香港特別行政区（香港島及び九龍半島；主として香港島北部）
- * 訪問時期（移動日を含む）：2017年（平成29年）2月19日～2月23日
- * 費用（概算）：15万円（高知香港往復航空券7万、宿泊費6万、その他2万）

◇実施概要

- * 受講学生：1年生3名（男1、女2）、2年生2名（男1、女1）
- * 費用（受講学生）：96,700円（内訳：高知駅と香港宿泊先との往復交通費60,483円、香港宿泊費27,792円、滞在中の支出（食費、交通費等）8,425円（ただし軽飲食物や土産など学生が各自で購入したものを除く））

◇スケジュール（受講者募集、事前学習、現地実習、事後報告等）

10月中～下旬 受講生募集説明会（10/13、10/24）

11月上旬～2月上旬：事前学習会等の実施

①香港および海外実習に関する学習会

12月12日（月）1限「イギリス帝国史／グローバル・ヒストリーのなかの香港」（川本）

12月19日（月）1限「異文化コミュニケーション論からのアプローチ」（リングリィ）

12月23日（金）2・3限「海外旅行にかかる心得と手続きについて」（川本）

1月23日（月）1限「香港ってどんなところ？」（特別講義：高橋俊）

2月10日（金）1限「香港の地理／現地調査テーマの検討」（川本）

2月13日（月）1限「現地調査テーマの確定／テーマの概要（英文）にかかる指導」

（川本・リングリィ）

②ローンボウルズ実技練習（川本）

11月21日（月）1限、12月26日（月）1・2限、1月16日（月）1・2限、

1月30日（月）1・2限、2月13日（月）2限

2月19日～23日（日～木）現地訪問（詳細は別記「現地実習の詳細」のとおり）

3月7日（火）3限 レポート発表会（中間発表）

4月11日（火）最終レポート提出締切

◇その他（準備に関する事項）

・香港のローンボウルズ施設での実習にかんして、香港ローンボウルズ協会（香港草地滾球總會：Hong Kong Lawn Bowls Association；以下「HKLB A」と略記）に授業の趣旨を伝え、メールならびに面談（2015年12月の授業担当者による香港訪問；香港側関係者が2016年10月に別件で訪日）して協議を進めた結果、HKLB Aならびに加盟クラブの協力を得られることになった。

◇現地実習の詳細

2月19日（日）

高知駅9時集合 9時30分発（JRバス）で神戸三宮13時43分着。14時20分発空港リムジンバスで関西空港15時25分着。関西国際空港18時05分発（CX507）で香港国際空港21時35分着。空港内で両替及び鉄道乗車券を購入し、エアポートエクスプレス（鉄道）とホテルシャトル（バス）を乗り継いで、23時30分頃に宿泊所であるL'hotel Causeway Bay Harbour Viewに到着。受講生をツインルーム3室（2+2+1）に割り振る。

2月20日（月）

ホテルロビーに8時集合。ホテルに近接するカフェで朝食。9時半に再集合し、香港フットボールクラブ（HKFC）ローンボウルズセクション・チェアマンであるジョニー・ツァン氏夫妻の案内により、九龍半島南部での実習に出発。ホテルから地下鉄とフェリーを乗り継いで九龍半島に渡る。旧水上警察を経由して徒歩で香港歴史博物館を訪ね、見学。昼食後、九龍ボウリンググリーンクラブ（KBGC）にてHKLB A会長ヴィンセント・チャン氏と会い、同氏も案内役に加わって、同クラブ、クラブ・デ・レクレイオ、九龍クリケットクラブを見学。KBGCダイニングルームにおいてHKLB A主宰の夕食会（同クラブ会長アラン・ロー氏、

同事務長ジョン・ラン氏、ほかクラブメンバー1名も同席して歓談)。そのあとテンプル・ストリートのナイトマーケットを見学、22時頃までに宿に戻り、解散。

2月21日(火)

ホテルロビーに9時集合。ヴィクトリア公園まで移動し、園内各種施設を見学。隣接する香港中央図書館に入り、見学。そのあと保良局歴史博物館に移動し、見学。さらに香港スタジアム前まで移動し、スタジアムに隣接するインディアン・レクリエーション・クラブ到着。同クラブ内レストランにてHKLB A会長ヴィンセント・チャン氏主宰の昼食会のあと、施設とローンボウルズ練習を見学。14時30分ごろにクラブを出発、セントマーガレット教会に立ち寄ったあと、跑馬地にあるクレイゲンガウアー・クリケット・クラブ(CCC)に到着。同クラブメンバーであるクロード・ラス・ラム氏(HKLB A副会長)の案内により施設見学。そのあと隣接するHKFCに移動し、16時ごろからHKLB Aレベル2コーチであるハーバート・クック氏(HKLB A理事; HKFCローンボウルズセクション副チェアマン)により1時間半にわたり屋内グリーンでローンボウルズの実技指導を受ける。休憩後、ツァン氏の案内により同クラブ施設を見学。この日はここまですべて徒歩による移動であった。その後、路線バスでホテルに戻って各自夕食をとったのち、20時25分に再びホテルロビーに集合し、トラムでHKFCを再訪して屋内グリーンでおこなわれていた香港内の公式戦を観戦する(ツァン氏による解説付き)。試合終了後、路線バスで宿に帰り、22時50分頃に解散。

2月22日(水)

ホテルロビーに8時45分集合。ツァン氏夫妻の案内により、トラムと路線バスを乗り継ぎ香港島南部の町スタンレー(赤柱)を訪問し、栈橋とその周辺に配置された天后廟や北帝廟などの宗教施設とマーケットを見学。香港島東部を回る路線バスと地下鉄を乗り継いで銅鑼湾、徒歩でHKFCに到着。同クラブ内レストランで昼食後、屋内グリーンで学生、教員、ツァン氏夫妻で2チームに分かれて模擬試合(フォアーズ戦; 8エンド)をおこなう。いったんホテルに戻り、18時すぎに再集合して、ホテル近くのヴィクトリア公園ローンボウルズ場でおこなわれている香港ユースチーム(Hong Kong Youth Development Team)の練習セッションを訪問。練習前に主任コーチであるアーサー・イウ氏と主力男子選手2名による自己紹介と活動説明を聞き、学生との意見交換をおこなう。練習の様子を見学したあと、タクシーにて灣仔のコンベンションセンター近くに移動、イルミネーション・イベントをみてから、駅近くの食堂で夕食をとり、地下鉄でホテルに戻り、22時すぎに解散。

2月23日(木)

ホテルロビーに7時30分集合。地下鉄・鉄道を乗り継いで香港国際空港着。同空港10時30分発(CX506)の搭乗予定便が1時間15分の遅延となり、関西空港16時着。空港リムジンバスで三宮に移動して、なんとか当初の予定どおりの高知行き高速バスに乗る。高知駅バスターミナルに着き、22時40分頃に解散。

◇実習の成果

《事後指導／最終レポート》

3月7日に学部棟第1会議室にてレポート作成のための中間発表にあたる事後学習・指導会

を実施したのち、各自が定めたテーマにそって最終レポートを提出させた。同レポートの英文アブストラクトは別掲（【資料①】）のとおりである。

《現地での実習成果にかかわる特記事項》

(1) 歴史博物館、宗教施設、街並み、飲食施設など、本実習の核となる香港の歴史と文化にかかる事物をひととおり見学することができた。とくにH K L B Aのバックアップにより、香港のスポーツ文化の重要な一角をなすローンボウルズの関連施設（歴史的建造物を含む）を案内・解説付きで見学できた。なお、H K F Cの月報（2017年4月号）誌面で本実習の様子が紹介された（【資料②】）。

(2) 現地での移動の大半を徒歩と公共交通機関によったことで、地理的に限られた範囲ではあるが、現地の人びとの日常生活圏を身近に観察することができた。

(3) これも限られた時間ではあったが、受講生に近い年齢（20歳代前半）の香港ユース代表選手との交流により、いわゆる「大学における学生間交流」では接することがない（＝大学生ではない）現地の同世代人との接点をもつことができた。

《成果発表など》

エフエム高知で放送されている高知大学広報番組「THE こうちユニバーシティ CLUB」で「海外に飛び出す授業！：人文社会科学部の国際社会実習」というタイトルの下、他国へのスタディツアー受講生とともに本実習からは田中宣仁が出演した（4月16日（日）午前9:30～9:55 オンエア；音源はウェブサイト <http://www.fmkochi.com/club/170416.mp3>）。

◇反省点と今後の課題

(1) 今回の実習にはH K L B AならびにH K F Cの協力と支援が不可欠であった。とくに、前者会長チャン氏による各クラブ施設見学の手配、案内・解説、食事会の主催、そして後者ローンボウルズセクション・チェアマンであるツァン氏夫妻は現地での活動時間の3分の2以上に同行し案内役を務めてくださった。そのほかにも上述のとおり香港ローンボウルズ関係者のさまざまな協力があった。ただ、このような協力・支援態勢はあくまで先方のボランタリーな厚意に拠るところが大きかった。とくに、先方主催による夕食会や昼食会は、こちらから書面にて正式に依頼した内容（施設見学と同案内・ローンボウルズ場の使用等）にも含まれておらず、まったく先方の友好的配慮による企画であった。もし今後も引き続き同様の実習を開講するのであれば、コースないし学部と現地協力者の間でかわされる協力（依頼）の仕組みと手続きについて、正規の授業にふさわしい形を検討したほうがよいと考える。

(2) 現地での実習手法とその内容がいささか手薄になった感があった。具体的にいえば、博物館、スポーツ施設、歴史的建造物等を見学して得られた知見や考察について受講生が確認／共有／議論する機会がほとんどなかったこと、あるいは全体を通してみるいわゆる「観光」的な要素が強かったように思えたこと（教員の主観的印象にとどまらず、ユースチームの選手やスタッフとの交流機会がもっと多い（長い）ほうがよかったという受講生の感想も聞いた）などである。前者については、たとえば各日の見学等終了後にレビュー・セッションの時間を設けることで改善できるだろう。後者については、現地企画のブラッシュアップとともに、現地協力者と教員との間でより詳細かつ丁寧な打ち合わせによって対応できるだろう。いずれの

点についても、現地でのひとつひとつの活動にかかる目的を明確化させる時間と手続きを適確にとることが必要であると考ええる。

(3) 本実習が他のスタディツアーと比べて現地活動(滞在)日数が短かったのは、担当教員が「正規カリキュラムとしての諸条件が許す範囲で、できるだけ費用をおさえることにより、より高額のコストがかかるスタディツアーには参加しづらい学生も参加しやすい実習をつくる」と考えたことによる。今回の受講生のなかにそうした事情に合致する者がいたかどうかは不明であるが、実習内容の改善と拡充を検討する際にもそうした観点を意識することには一定の意義があると考ええる。

【資料①】 受講生最終レポート：英文アブストラクト

田中宣仁（国際社会コース1年）

We visited to the northern part of Hong Kong Island and Kowloon Peninsula during our Hong Kong Study tour. At that time, I visited nine sports facilities in Hong Kong: Hong Kong Football Club, Victoria Park, Club de Recreio, Kowloon Cricket Club, Kowloon Bowling Green Club, Hong Kong Stadium, Indian Recreation Club, Craigengower Cricket Club, and Causeway Bay Sports Ground. HKFC, Club de Recreio, KCC, KBGC, IRCC and CCC are private sports facilities. The others are public sports facilities. In private clubs, there are facilities to play sports that originated in the British Commonwealth. For example, Lawn Bowls, Cricket, Tennis, and Badminton. In the public facilities, there are soccer courts, tennis courts, handball courts, multi-purpose grass open spaces, and basketball courts. Because they are public facilities, users do not need to be a member and don't pay charges for use except a part of the facility. Both private facilities and public facilities have many good points. In this report, I compare the Hong Kong facilities with sports facilities in Japan. I will focus on the HKFC and Victoria Park as examples of private and public facilities because they are large-scale facilities and have many good points. In this paper, I will write about the differences between these two HK facilities, and make some comparisons with sports facilities in Japan.

成谷宏美（国際社会コース1年）

My research related specifically to the sport of lawn bowls in Hong Kong. This report is structured into three sub-themes: The origin of lawn bowls in HK, the development of lawn bowls in HK, and the international relationships that have been established between Japan and Hong Kong through the sport. During the study tour, I learned how lawn bowls was introduced in HK, as well as how the position of lawn bowls in HK continues today. While taking part in this study tour, I was able to talk to many lawn bowls players, the members of Hong Kong Lawn Bowls Association, and visit many different lawn bowls clubs. I was able to learn about who exactly plays lawn bowls (cultural background of player, age/generation of players), and the scale of the sport in HK. Regarding the lawn bowls relationship between Hong Kong and Japan, there have been some recent lawn bowls events held in Japan, and many Hong

Kong players come to Japan. However, lawn bowls is still not a popular sport in Japan. For this reason, I also considered the future of lawn bowls in Japan. Finally, I asked some questions about lawn bowls to the Hong Kong bowlers, particularly those in the same age group as me.

福永美南海（国際社会コース 1 年）

In this report, I will write about my experience in Hong Kong related to the different examples of food culture, in particular Dim Sum (Dim Sum is “Chinese tea and snacks”, and when taking Dim Sum, we should enjoy conversation.) When thinking about a different culture, meals are an important theme. There are unique styles and cultural etiquette for meals depending on the country, religion, or culture. I focused on the food culture of Hong Kong by posing questions about the times when meals are held, how often people use restaurants and what kind of restaurants, whether there are any special manners or cultural traditions associated with meals, and how these traditions compare to Japan. I will focus on the manners and customs associated with food culture in Hong Kong. The purpose of this report is to compare the different culture in Hong Kong and Japan clearly. As a result, there are many examples of cultural influences on food and meals. For example, use of tableware, the time and different styles of Dim Sum, and the way to order the meals.

久武茉莉子（国際社会コミュニケーション学科 2 年）

My research theme for the Hong Kong study tour was to study about the souvenirs that are sold in Hong Kong. I was wondering about whether there is still any historical influence on these souvenirs from the British colonial period. Generally, souvenirs are made based on the motif and features of the city, its history, and the traditional features. As a former colony of England, I wanted to explore whether there is any evidence of this relationship still remaining in the kinds of souvenirs that are commonly sold nowadays. I asked one of the local guides, “What kind of souvenirs do you recommend?”. He said, “T-shirt! with ‘I love Hong Kong’”, and then continued by explaining that, “In Hong Kong, everything is imported.” Actually, I could not find many local or British influenced souvenirs. Hong Kong is comprised of various races, and only 20 years has passed since it reverted back from British control. I suggest that this is not enough time to gain the traditional/cultural features suitable for promoting souvenirs unique to Hong Kong.

渡部健一（国際社会コミュニケーション学科 2 年）

Lawn Bowls is recreational sport, and mainly older people are playing this sport in Hong Kong. However, there are some issues related to Lawn Bowls in Hong Kong. There are only a few Lawn Bowls greens available to players, and there are fewer players involved in Lawn Bowls among the younger generations. In this report, I discuss some possibilities about how to overcome these problems, taking Japanese sports activities as examples. In Japan, Gateball is a recreational sport like Lawn Bowls which is gaining in popularity among the younger generation. The main reason for its popularity is that high school students can play it as a club activity at school. Today, Gateball high school championships are

also held every year. Another reason is that some Japanese schools open their gymnasiums to people in the city. This contributes significantly to local sports activities. With reference to these Japanese examples, I suggest that if schools in Hong Kong make greens available in their playgrounds and teach Lawn Bowls to students as part of physical education lessons or club activities, students will notice the fun of Lawn Bowls. This will help to increase the Lawn Bowls playing population of the younger generation. Greens in the playground should be open to people in the city, making it possible for more people to enjoy Lawn Bowls. I think that these ideas will help to solve the problems faced by the sport of Lawn Bowls in Hong Kong.

【資料②】 *Hong Kong Football Club magazine*, April 2017, p.43.

Club's Lawn Bowls History Attracts Scholars from Kochi University, Japan



The Club's lawn bowls history traces back to year 1932 when the Club put down its first bowling green. Our rich history has recently attracted seven visiting scholars from Kochi University, Japan, including visiting Professor Darren S. Lingley and Associate Professor Masahiro Kawamoto, for a visit at the Club. They also toured the Hong Kong Museum of History and other leading bowling clubs in Hong Kong during their stay, for a study on the history of sports and cultural activities around the globe, in particular the development of lawn bowls in Hong Kong and other parts of Asia, as well as the latest development of our Club's bowling facilities and players.

Coach **Herbert Kwok** arranged a series of friendly games with the young contingent, along with our Section's Chairman **Johnny Tsang** on 21st and 22nd February. A great time was had by all.



**Report on the 2016/17 Canada Study Tour:
English for Academic Purposes (EAP) at UNB Saint John College**

「国際社会実習（外国語実習）I」

Darren Lingley

International Studies Course

The Canada Study Tour for the 2016/2017 academic year was held from March 4th through April 1st in Saint John, New Brunswick. Five participating students from the Faculty of Humanities and Social Sciences (International Studies Course) were enrolled at the University of New Brunswick's Saint John College throughout the month of March 2017, first taking part in a one-week special language and culture program and then transitioning into three weeks of an in-progress intensive fourteen-week English for Academic Purposes (EAP) Program. Saint John College's EAP Program consists of six levels and is designed primarily for international students who are planning to apply as regular students at UNB. Students progress through each of the levels developing their language and academic skills until they are prepared to enter a UNB Bachelor or Master degree program. The EAP Program not only helps students improve their English language skills but also introduces them to the academic environment of the university. Motivation is high among the international students who use the EAP Program to attain the required IELTS score of 6.5 for acceptance as a full-time UNB student.

This was the third Kochi University Canada Study Tour held at UNB Saint John College since 2012 (2012/13, 2013/14, 2016/17). The Canada Study Tour has always consisted of a four-week EAP Program and homestay, and we planned for the same study schedule this year. However, very late in our planning stage, UNB reconfigured its entire EAP Program from an eight-week course to a longer fourteen-week program running for the same period as regular classes. This meant that students enrolled in the fourteen-week EAP Program are subject to the same study breaks and conditions as regular students. The first week of our KU Canada Study Tour, after much planning and formal agreement, now overlapped with the one-week spring break at UNB from March 6th-10th. As a solution, Saint John College offered an intensive language and culture program, designed specifically for our group, for Week 1 of the study tour. To accommodate our special case, UNB provided language instructors for morning classes during the spring break week, and arranged various social and cultural activities for the afternoons. While this meant that our five KU students would not be studying with other international students during their first week in Canada, this intensive program allowed them to ease into their intensive EAP program with introductory morning ESL classes and afternoon events. Students were able to take their EAP placement test at a more leisurely pace than usual. They were also better able to recover from severe jetlag and get used to their homestays and Saint John lifestyle before joining the regular EAP program from Week 2 of the Study Tour. UNB provided a Federal Student Work grant to hire a recent graduate of the EAP Program to run cultural activities, under the supervision of Saint John College staff, during the afternoon sessions in Week 1. For a more details of the Week 1 culture and language program, please see the

accompanying schedule.

The five students from Kochi University were given an EAP placement test on Monday, March 6th. Saint John College uses the Accuplacer placement test to assess incoming students on Listening, Reading, Vocabulary, Grammar and Writing. Most aspects of the test are multiple choice except for the writing test which asks for a paragraph(s) on a given topic. The level of difficulty of the writing topic depends upon the total score in the other core areas. The writing sample is manually assessed when computer scoring is not able to detect enough sentence/grammar patterns to give an accurate score. The overall score on the Accuplacer test determines placement in the EAP Program. Scores range from 0 to a maximum of 480, and Saint John College refers to a score range for each level which provides a reliable predictor of success in each of the six levels. This is supplemented by an informal speaking assessment by a trained IELTS examiner to further ensure accurate placement in an appropriate level.

For this year's Kochi University cohort, three students were placed at Level 3 and two were placed in Level 4. All EAP classes are now held at the main UNBSJ campus. Of the six EAP levels, the difference between Level 3 and Level 4 is the greatest with Level 3 representing the highest of the beginner levels and Level 4 marking the first stage of the more advanced EAP levels. In these two levels, our Kochi University Study Tour members studied with other international students from China, Iran, Afghanistan, and Syria in small class sizes. While most students enrolled in the EAP Program are hoping to become regular UNB students, Saint John College is helping to accommodate the English-language needs of some of the more than 35,000 Syrian refugees who arrived in Canada during late 2015 and early 2016. In the case of the Syrian students in the EAP Program, many are recent refugees with pressing practical English communication needs. Throughout Canada, Saint John accepted the third highest number of Syrian refugees per capita and, while many of the refugees are not intending to become regular university students, they still need language support. UNB Saint John College has taken a role in supporting language training for the many refugees in need of English. Students in our KU group were able to learn more about the lives of refugees by studying together in the EAP classes.

Learning outcomes for students in Level 3 include language skills development for each of the core areas. For example, projected Speaking and Listening outcomes in Level 3 include developing strategies for discussions and gambits for discussions and interviews, understanding cues for interrupting, entering, leaving and ending discussions, and expressing and supporting opinions in presentations and discussions. The Writing course includes the development of different kinds of 3-4 paragraph essays such as descriptive, opinion, and comparative essays, and support in taking the first steps about learning how to acknowledge sources. By means of contrast, students in the Level 4 Speaking and Listening classes focus on gambits for debate, strategies for responding critically and spontaneously to oral and written passages, taking leading and supporting roles in a range of complex oral communications, and using research to support positions when orally paraphrasing, summarizing and synthesizing source information in presentations and formal debates. The Level 4 Writing class aims to develop short argumentative essays with a well-developed argument using focused support from reliable sources, the ability to paraphrase, summarize and quote from text, and incorporate numerical data and the ideas of

others from sources without plagiarizing. At this level, students also begin to more rigorously use the APA format for in-text citations and references. For the Reading course, Saint John College uses the Canadian Language Benchmarks (Benchmark 6 for Level 3 and Benchmark 7 for Level 4) in setting projected learning outcomes. While our KU group was able to join these levels for only three short weeks, all of our students got a good sense of what they were able to do in English according to these outcomes. Developing a sense of where further work is needed is an important part of studying English in this kind of environment.

In addition to classroom learning, Saint John College also organizes a number of social and cultural activities for international students. Everyone took part in a sugar bush tour in central New Brunswick near the end of our stay to learn about the process for tapping for maple syrup. I joined the sugar bush tour for the first time this year, and although I can attest that it was an excellent educational tour, students found it very difficult to understand the jargon that was used in detailing the historical development and technical processes involved in making maple syrup. The fluctuating temperatures of March are an important part of the process of making maple syrup (tapping the trees and boiling down the sap). When it is slightly above freezing during the day and below freezing at nighttime, as is typical of March weather, the maple sap flows freely. The end of March is usually the best time to visit a sugar shack because that is when the indigenous black maples and sugar maples of New Brunswick are ready to be tapped. However, because it stayed so cold this year in March, as it has in recent seasons, many maple sugar farmers in the province are struggling because they are not able to produce the usual amounts. Still, students were able to walk through the maple forest, see the buckets hanging from trees, and enter the sugar shack where we learned that it takes over 40 liters of sap to produce one liter of maple syrup. We also enjoyed making maple ice candy and eating pancakes with maple syrup at the sugar bush lodge.

Other social activities included a sushi dinner at a local Japanese restaurant where students from Kochi University could meet with members of the local Japanese community. This year's group also enjoyed an afternoon of curling lessons, practice, and a friendly game at Thistle St. Andrews Curling Club with volunteer curling instructors. Students had a great time learning the fundamentals of this challenging sport, and we appreciated the warm and patient instruction of the two volunteers who worked with our group. Another highlight was a visit to the local downhill New Brunswick ski resort of Poley Mountain, where homestay families took students for a day of skiing during their second weekend in Canada. Students also got a sense of the important role of winter sports in Canada by attending Saint John Sea Dogs hockey games, and attending Saint John Riptide professional basketball games. The excitement level was high during the basketball games because our students were able to meet and communicate with the players through the team's community outreach efforts. They also experienced an evening of indoor rock climbing with their homestay families.

As with all of our March Canada Study Tours, the most challenging part was dealing with the weather. Frigid temperatures greeted us on our arrival and it stayed very cold during the first week and throughout the month. We were lucky that the weather cooperated during outings such as skiing and sugar bush, but overall it was colder than usual in March and we experienced a couple of small snow storms. Students

were surprised by the depth of the coldness; no matter how much we prepare about the weather and the clothing needed to stay warm while outdoors in Canada during our pre-departure sessions, it still comes as a shock to students when they experience firsthand the deep cold. While we were in New Brunswick, ice fishing shacks could still be seen on the Saint John and Kennebecasis Rivers, and the river ice flows were amazing during our rides on the New Brunswick ferry network.

Images of cold weather aside, students had very warm feeling about their Saint John College teachers and homestay families. There were many tears when homestay families dropped off the KU students at my home where they spent their last night in Canada. I watched in amazement at the long goodbyes, hugs, and crying. Because this year's study tour group was so small – only five students – they were able to spend lots of time getting to know each other's homestay families. Seeing the Japanese students in tears, the Canadian homestay Moms started choking up too, and several told me that such goodbyes were simply too painful. This speaks to the kind of connections our students make during an intensive homestay of one month. For our students, the homestay experience is as meaningful as the language study course, if not more so. In one sense, four weeks is a very short time, but the intensity of the experience lasts a lifetime for our students – for some it is their first and only time abroad. Students were able to get a brief but meaningful taste of life and study in Canada while sharing time cooking, socializing, and enjoying the slow pace of New Brunswick winter lifestyle with their host families and other international students.

As the study tour coordinator, I was impressed with how our students met the challenges of being in a foreign setting in which they have to struggle in their second language. These challenges include the basic struggle to understand classroom content, and to engage in every day English communication with homestay families and other international students. It also includes negotiation of the many small hurdles that students face in daily communication like asking for more information about something on a menu, arranging a pick-up time over the telephone, understanding bus schedules, and figuring out how much to tip. The five students on this year's tour approached all difficulties with a wonderful sense of mission and proactive effort. Some struggled with homestay food, some unsuccessfully applied their own cultural conventions in situations calling for something more direct, and some focused too deeply on small details when I thought they should be thinking more about the 'big picture'. But that is all part of the process of being abroad, and all of them quite obviously grew as people. As always for me, it is most impressive to see the great personal growth and the increase in English language confidence among study tour participants, even during such a short period of time. There is just so much about study abroad that cannot be measured; thinking in terms of concrete outcomes is not enough for this kind of study tour. I am certain that students come away from such international experiences greatly changed for having succeeded in a whole new educational and cultural environment. However, accurately describing just how much they have changed, or how, is not always easy.

I would like to acknowledge the administrative staff and teachers at UNB Saint John College for their usual enthusiasm and quality program. ESL/EAP Programs with a built-in homestay program are an increasing rarity these days. It has become increasingly difficult for hosting schools to arrange reliable

and enthusiastic homestays for an entire month. Saint John College stopped organizing homestays several years ago but they continue to make an exception for our Kochi University group in the knowledge that Japanese students get so much out of the homestay experience in a short month. Even with the late change to our program due to broader university-level planning, Lindsay Taylor Doiron worked to arrange a strong alternative program for us during the first week for which I am grateful. I was able to hold in-depth meetings with her and the UNB SJC staff about sending unescorted study tours in the future, and I met briefly with the Vice-President of UNB who was extremely enthusiastic about our study tour. The staff of Saint John College is always receptive to our needs and provided excellent suggestions for support and risk management should we decide in the future to send a group of students on their own rather than having a Course member accompany them. To this end, we were very lucky that two staff members from UNB were able to visit Kochi University in November 2016, just prior to our study tour, to participate in one of our four pre-departure sessions. Peihong April Duan from UNB SJC, and Christopher Beardsworth, from UNB's International Recruiting Division, spoke to students and met formally with me and Professor Nakanishi about possibilities for developing the KU Study Tour Program and other study abroad options between Kochi University and UNB. Special thanks as always to Twyla McCarthy who is the Program Coordinator for Saint John College. She organized all of the excellent homestays and takes care of our students very well including providing drives to school for one student who was staying near her home. Finally, the language teachers who worked daily with our students at Saint John College are all very accomplished and experienced teachers. All teachers prepared challenging level-appropriate communicative student-centered materials, and presented them in a way that encouraged students to stretch their language abilities. They were willing to share their materials with me and discuss their methods, and were very open and receptive about me observing lessons. They spoke of our KU study tour members as model students and described them as a pleasure to work with. Additionally, I am including a media release written by UNB's Communication Officer, Colin Hodd. For this story, Mr. Hodd interviewed me and the KU students. We are grateful for his efforts to promote the KU Canada Study Tour.

Immediately following this report, please take some time to read the brief reports written in English by the five participating 2016/17 Canada Study Tour members. Students are given freedom to draft their report on topics of interest to them. I was impressed by what they wrote about their homestay families, the EAP course, and the study tour experience in general. They have included some memorable photos taken during their stay in Canada. The reports are quite brief; indeed, most of their study abroad assessment is based on their hard work in the classroom in Canada. Each report is but a small window into what they experienced in total.



Study Tour Itinerary

2017 年 3 月 4 日 (土) : Kochi-Haneda	[NH568, 15:25-16:40]
Narita-Toronto	[AC006, 18:50-16:45]
Toronto-Saint John	[AC8972, 22:05-01:27(03/05)]
2017 年 3 月 31 日 (金) : Saint John-Halifax*	[AC8830, 05:45-06:30]
Halifax-Toronto	[AC609, 09:15-10:45]
Toronto-Haneda	[AC005, 13:45-15:35 (04/01)]
*Itinerary change due to Air Canada re-scheduling	
2017 年 4 月 1 日 (土) : Haneda-Kochi	[NH569, 18:50-20:10]

Program details :

3 月 5 日 (日) ~ 31 日 (金) : ホストファミリーと生活

3 月 6 日 (月) ~ 10 日 (金) : 授業開始、クラス分けテスト、

Special Program English classes/Culture activities

3 月 13 日 (月) ~ 30 日 (木) : English for Academic Purposes (EAP; 大学で学ぶための英語)

週 24 時間の学習で英語 4 技能を学ぶ

Course Assessment 「国際社会実習 (外国語実習) I」

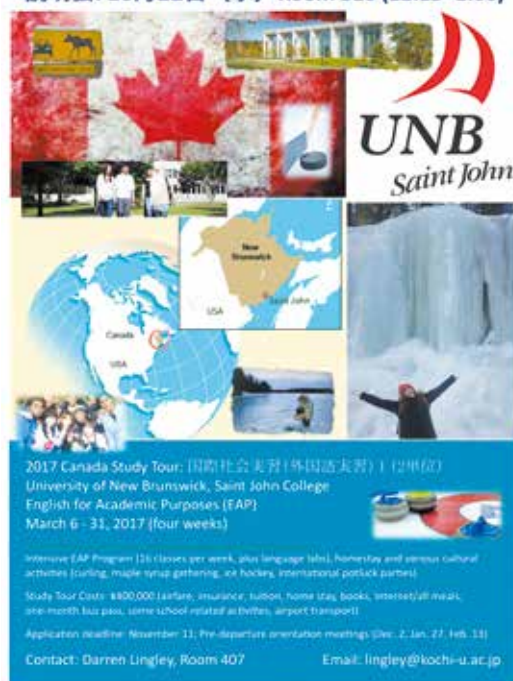
Assessment for intensive lecture credit is based on the following:

1. Participation in pre-departure meetings (4) and post-EAP session (1)
2. Language proficiency progress reports by SJC EAP course teachers
3. Written report (English)

Tour costs

	\$ CDN	Japanese yen
Airfare		¥159,400
UNB/SJC EAP tuition	\$1750	
Text books	\$175	
Homestay	\$800 = (\$3257)	= ¥290,000 (89.03)
Saint John Transit pass	\$70	
Spending money	\$462	
Travel insurance (Japan)		¥12,000 (average)
Plus: Canada eTA visa	\$7	
Total		¥461,400

2017 Canada Study Tour & Homestay
説明会: 10月12日 (水) Room 310 (12:15 -1:00)



March Break Schedule of Activities
For Kochi University Students
March 6th to 10th, 2017

Date	Activity	Time	Location
Monday, March 6 th , 2017	SJC English Placement Test	9:30 am – 12:00 pm	SJC 15
Monday, March 6 th , 2017	Tour of UNB Saint John campus (buy SJ transit bus passes at UNB bookstore)	1:00 pm – 2:00 pm	Meet in front of cafeteria (Student Centre building)
Tuesday, March 7 th , 2017	Practical English Class: <i>Conversation English (Small talk/directions/questions)</i>	9:00 – 10:30 am	SJC
Tuesday, March 7 th , 2017	Practical English Class: <i>Situational English (Asking for directions, asking questions)</i>	10:45 am – 12:15 pm	SJC
Tuesday, March 7 th , 2017	Uptown Scavenger Hunt	1:45 pm – 3:45 pm	Travel by bus from SJC
Wednesday, March 8 th , 2017	Practical English Class: <i>Conversational English (Food)</i>	9:00 – 10:30 am	SJC
Wednesday, March 8 th , 2017	Practical English Class: <i>Situational English (Talking about Food)</i>	10:45 am – 12:15 pm	SJC
Wednesday, March 8 th , 2017	Cooking Class at SJ Superstore (Cooking Canadian food)	1:45 pm – 3:45 pm	Travel by bus from SJC
Thursday, March 9 th , 2017	Practical English Class: <i>Conversational English (Canadian Culture)</i>	9:00 – 10:30 am	SJC
Thursday, March 9 th , 2017	Practical English Class: <i>Situational English (Talking about Culture)</i>	10:45 am – 12:15 pm	SJC
Thursday, March 9 th , 2017	Visit to NB Museum (Market Square)	1:45 pm – 3:45 pm	Travel by bus from SJC
Friday, March 10 th , 2017	Winter Activity Day (snow-shoeing, cross-country skiing, snowman building, snowball fight, hot chocolate, etc.)	9:00 am – 3:00 pm	Rockwood Park

Japanese students experience Canada through the University of New Brunswick

By Colin Hodd (UNB Communications Office)

Saint John Sea Dogs games. Maple syrup. Curling. Skiing. Skating. These are a few of the things that five students from Japan's Kochi University have been experiencing through the University of New Brunswick's Saint John College over the past four weeks.

The students and their professor, Darren Lingley, are with the Faculty of Humanities and Social Sciences at Kochi University, and are in New Brunswick for an immersive English experience as part of their International Studies course.

Each student is connected with a homestay, a host family, to ensure that their immersion is as complete as possible.

"Even though a month seems like a short time, it really is the opportunity of a lifetime for many of the students," said Professor Lingley. "Studying with highly motivated students in an all-English environment, and then using English with homestay families is beneficial for the Japanese students in that they can see that English is not just something to study in class."

Lingley, a native of Saint John, attended both UNB Fredericton and UNB Saint John as a student, earning a bachelor's degree in history in 1988 at UNBSJ, followed by his master's at UNB in 1990 before capping things with an education degree, also at UNB, in 1991. He has been in Japan for the past 25 years but was actually at UNB in 2014-15 on sabbatical. He said that the experience of leaving home and bringing people back to Saint John has somewhat ironically strengthened his sense of connection to the city and the country.

"I didn't really become a Canadian until I went to Japan. You develop a sense of pride about where you come from over the years," said Professor Lingley. "Introducing them to indoor culture, skating, curling, these kinds of things I took for granted when I was here before."

The first tours of this kind were done in the late 1990s, when what is now Saint John College was the Modern Languages Centre. More recently, Lingley brought groups in 2012 and 2014. Simultaneous immersion in classroom and community culture gives the visiting students an experience of the English language that cannot be matched by their studies in Japan.

"We feel very fortunate to have had the opportunity to develop such a close working relationship with Darren Lingley and Kochi University and are pleased to be hosting Kochi students for the third time," said Lindsay Taylor Doiron, Associate Director of Saint John College. "The Japanese students are always

a welcome addition to our English for Academic Purposes Program. Not only do they bring with them a very strong work ethic but they also lend such positivity and enthusiasm to the classroom environment.”

For Momoko Date, it was experiencing the sheer variety of English variants that exist outside of the version they are taught at Kochi University.

“In class there are many Chinese, Syrians, Afghans and Iranians,” she said. “I can see many kinds of cultures and they speak English with different pronunciations, so I had to understand their English. So I know that English is different depending on who is speaking it.”

Shiho Katayama noticed that the approach to classroom learning is much different in Canada. Japanese classes are built on students receiving knowledge, and it was surprising to her to see people speaking out in class.

“In Japan the students receive information, but here we can speak out and express ourselves more. That was so different for me,” she said.

So much of a culture is in its food, and the homestay program allows the visiting students to see more than just restaurants, along with other elements of what constitutes home in New Brunswick. Ms. Katayama was introduced to a new frontier in comfort food:

“My host parent taught me knitting and she taught me about Canadian food like nachos and poutine.”

Ms. Date developed a taste for hockey, and for Canada’s answer to Japan’s preferred carbohydrate, although she found herself missing home cooking as well.

“We usually eat rice but Canadians eat potatoes, so every day we eat dinner there are potatoes,” she said. “I like them, but I want to eat rice.”

Long-term, Professor Lingley hopes to be able to make this program an annual event. He credits a strong partnership with UNB Saint John College with making it easy to know that students will be well-taken care of during their time in Canada.

“There is lots that can't be easily measured, lasting friendships with other international students and homestay families,” said Professor Lingley. “For Kochi University, it is a great benefit to have a cooperating institution like Saint John College that we are always confident will ensure a quality learning environment, arrange outstanding homestay families, and provide a level of hospitality and care not found elsewhere.”

Understanding the Importance of English as an International Language

Momoko Date (伊達 桃子)

人文社会科学科国際社会コース 1 回生

This was the first overseas trip for me, and I was very worried about life in Canada. I did not have much confidence in my English skills, but I wanted to try something new. I thought I would be able to have many good experiences, so I decided to join this year's Canada Study Tour.

In my school life at the University of New Brunswick's Saint John College, I learned a lot of different things. We took a placement test on the first day. I did my best, though I wasn't satisfied with my work. After a few days, we learned the result and my class was decided as the Level 4 class, which was the second highest class in the EAP Program. I was surprised by this result and I was nervous at that time because I worried too much about my English skills. In the Level 4 class, there were people from many other countries, such as China, Afghanistan, Syria, and Iran. They could speak English fluently, but they used quite different pronunciations. They spoke English, but I felt at first that they spoke different languages. It was difficult for me to understand their English. In Japan, we always speak with a native speaker teacher, so I was not really aware of the great variety of English pronunciations. I could not understand their English at first, but I gradually became familiar with their respective varieties of English. I strongly felt that even if I get a good result in the English examination, it still wouldn't be that useful without the ability to catch these different kinds of English. I also learned that we need a little time and exposure to adapt to the many ways that English is spoken.

I spent three weeks with my classmates after a one-week special program that was given to our Japanese group during the UNB spring break. We talked about our cultures, our habits, and our personal experiences but I wanted to talk more with them. I thought that communication skill was just as important as English language skill. However, English was the only way to communicate with them, so they pushed me to study and use English more. I felt strongly that it was important for me to improve my English skills after I returned to Japan.

I found satisfaction in this Canada Study Tour. I was able to understand some of my weaknesses in English, and this was a good chance to actually make a new starting point for my learning. This experience made me focus on what I need to do to continue to improve my English skills.



My Wonderful Experiences in Saint John, N.B. Canada

Naoko Goto (後藤 菜央子)

人文社会科学科国際社会コース 1 回生

Staying in Canada was a wonderful experience for me and I think it was very good to join this year's Canada Study Tour. Before I went to Canada, I had a lot of concerns such whether I can keep up with the English classes, whether I can make good relationships with my host family, and whether I would like the food. However, these concerns disappeared instantly upon my arrival in Saint John.

I studied at the University of New Brunswick and I took listening and speaking classes, and writing and reading classes every weekday. Classes were separated into five levels based on English skill and I entered the Level 3 class. This class was a small class that had four Chinese students, one Syrian and three Japanese students from our study tour. This class was already in progress, but they welcomed us kindly so I wasn't nervous and I could speak out about my opinions actively.

The most difficult thing for me was understanding what students from other countries were saying. At first, I felt their English was strange because their pronunciation is different from the Japanese English that I am familiar with, or the native English which I hear from teachers in Japan. For example, my classmate Ali, from Syria, wanted to pronounce the "P" sound but I heard "B". Therefore, I couldn't understand even words like "police" and I often asked him how he spell it. Also, it was difficult for me to explain the meaning of words. I can understand meaning of words in Japanese, but I had to paraphrase words in English. So, I frequently used an English-English dictionary, which I had never used before. This gave me a good chance since I found new words and the difference in nuance of certain expressions. I am planning to take advantage of English-English dictionaries from now on as I continue studying English.

In daily life, my host mother helped me with a lot of things. Her name is Heather, and she is a very energetic and kind person. She always tried patiently to understand my poor English until the end because she teaches English as a Second Language at the local YMCA. She would wake me up, cook delicious foods for me, and take me to and from the university, and did many other things too. Thanks to her, I could experience various activities during my month in Canada.

Watching sports is one of my great memories from stay in Saint John. I watched hockey games and basketball games, four times in total. Both cost only about 12 dollars. There is a big screen above the court or rink, and I was surprised to see that dance time started with music during breaks in the game. At first I was shy but I thought everyone doesn't know me because this is Canada. So, I danced with my friends for the 'Dance Cam' and our performance was shown to everyone on the big screen – this was so exciting! The day before I came back to Japan, I watched a basketball game and I talked informally to the players after the game. At the beginning of the study tour, I couldn't believe that I would have such a conversation with professional basketball players. Such an experience helped build my confidence for using English.

The month went by very quickly and everything was fresh. I will study English hard in Japan, and I want to go back to Canada to show my language growth to everyone who I met while on the study tour in Saint John.



Canada's Winter Wonderland

Maho Kadota (門田真歩)

人文社会科学科国際社会コース 1 回生

During the Canada Study Tour, I experienced lots of different things such as classroom learning, different food and sports, and living in a Canadian homestay. But in this report, I would like to focus mainly on how I felt about Canadian winter.

Before I went to Canada on this study tour, I thought the Canadian temperature would be so cold that it would be hard for me to live. Compared with Kochi's winter, it was surely so much colder. My face was often frozen and it was a different kind of cold – much deeper. However, when I actually went to Saint John, New Brunswick, I thought I could stand the cold weather. In Saint John, sometimes it often snowed. There were days when it was sunny, but while we were in Saint John, there was always snow on the ground.

I shared a homestay with my friend, Naoko, who is also a Kochi University student, so we always played in the snow together after a snow storm when there was lots of snow on the ground. We made a snow fort and a snow man and snow angels. When we made our snow fort, at first, we piled snow to make the walls. However, as the walls gradually grew higher, we found that this way would be difficult to make the snow fort's roof. Then we realized that we were making it the wrong way. So, we did some quick research about how best to make a snow house, and we started again. The right way was that we had to pile snow like a dome at first, then we had to bore a hole into the snow. When we made our snow house, we talked to some neighborhood kids. Their conversational speed was so fast that we couldn't understand them so well. But this was actually a very nice chance to have real communication with Canadian kids. Finally, we were able to make a snow fort, but it was too small. The snow house could accommodate only one person.

Also, we had some interesting experiences making a snow man. Our first effort was when the snow first fell, but the snow was not good for making a snow man. We need heavy, wet snow for this but the snow was actually dry and like sand. At that time, our host mother taught us that we should have waited until snow gets sticky, and that it needs more moisture. So we started again when the consistency of the snow began to change, including moisture. We had an image that snowballs are made by being rolled, but we couldn't make snowballs well when we tried rolling them. We tried again and again, and we needed patience and perseverance. It was much harder work than we expected. We wanted to make a big snow man like a real person, but we gave up. I gave up making a bigger snowball right away, but Naoko kept trying. However, I started making it before her, and we finally made a snowman which had only a little size difference between body and head.

These experiences were our memories of playing in the snow. I hadn't experienced this before, so it was very exciting for me. I found that playing in the snow need protection against the cold, lots of time, skill and perseverance. Kochi, where I am from, hardly gets any snow, but someday I want to play in the

snow again.

Of course, I went downhill skiing in Canada, and I also went curling for the first time. I experienced how much Canadians like ice hockey and how they coped with winter. But more than this, I was most happy when simply playing outdoors in the snow.



Easygoing Canadian Communication Style

Shiho Katayama (片山 紫帆)

人文社会科学科国際社会コース 1 回生

I joined the 2017 Canada Study Tour and it definitely became an irreplaceable experience in my life thus far. I spent one month in Saint John, New Brunswick, Canada. This was the longest trip that I have ever taken and it was the first time I have been to Canada. I had never been to such a cold place like Canada, so I was quite worried about that. But when I actually got there, I didn't mind about the cold too much because Canadian houses are warm unlike Japan. When I came back to Japan, I actually felt cold in my Japanese house even though there is a difference of more than 10 degrees.

While I was staying in Canada, I went to UNB to study English from Monday to Friday. In Japan, most classes that I have experienced the students are receiving the lecture from the teacher. In other words, students are just listening. But in Canada, students must speak a lot during class and this was very fun for me. There were eight students in my class from Japan, Syria, and China. We were almost at the same level of English based on the UNB placement test. It was the first time to be able to make friends with students who can speak English about the same ability as me. I have a lot of foreign friends but they can speak English or Japanese fluently. So, it is wonderful for me to make friends who are at the same level as me. Of course, it is difficult to always have smooth conversations with them but I felt our English improved through interaction with each other. We always had to explain briefly when we can't understand words or expressions. I found it very helpful for us to talk to each other.

I also stayed with my host mother for one month. I think that home stays are the best opportunity to learn about real Canadian life. I cooked Canadian supper every day with my host mother and found that most Canadian foods are cooked quickly and easily. Because they don't spend a lot of time eating and cooking, they value the time they spend with their family and friends. We can also see this from the fact that shops close early. That's unimaginable in Japan. I am drawn to this Canadian style, and I want to value the time I spend with my family and friends more.

I was surprised that Canadian people like to communicate with other people who they don't know. While I was in Canada, I saw many such situations. For example, waiting for a bus, riding the bus, during shopping, even at the cashier people seemed to be communicative and friendly with each other. This was an interesting thing to compare with Japan because I don't see this communication style so much here in Japan. I mentioned this to my speaking and listening teacher about being surprised that Canadian people always talk so freely with strangers. She said to me that she talked with the man who was cleaning the windows at UNB for about an hour. In Japan, I think this is quite unusual, but in Canada it seems to be fairly common. In this matter, I like Canadian communication style, and I like the kindness that people showed by opening and holding the door for the next person. I felt good about that. Canadian people like to talk and they are very friendly and kind, and this made me feel comfortable.

I think that to travel abroad is a growth experience. This trip makes my life good and often think about

how I miss life in Canada. I treasure this memory and this experience has made me want to go abroad again.



Appreciating the Openness of Canadian People

Mei Yoshida (吉田 芽衣)

人文社会科学科国際社会コース 1 回生

The Canada Study Tour to UNB's Saint John College was the first time for me to visit Canada. I had never experienced such cold weather, so much snow, such beautiful nature and, of course, such a different culture. Everything was new and interesting and through this study tour, I could feel Canadian kindness and noticed some differences between the nature of Japanese and Canadian people.

I thought that Canadian people seemed more open and naturally friendly than Japanese. For example, while taking the bus, Canadian people communicated not only with their own friends but also to strangers. And they always started a conversation with, "How are you?", and ended with "Have a nice day!". I also noticed that many people said, "Thank you" to the bus driver when they got off the bus.

I also realized some big personality differences between Japanese and Canadian. One day, my host mother told me about her personal history such as her career, this being her second marriage, and about her family structure. She also told me her parents accepted her as an adopted child. I was very surprised by this because Japanese people don't really talk about such kinds of personal topics to other people. Especially divorce and complex family situations are often not spoken about. But my host mother told me these things without hesitation, and without me prompting her.

In addition, on the first day of my homestay, my host parents said to me, "Make yourself at home. You can use and eat anything. And if you want to do something, you can tell us. Don't be shy." But even though it was clear to me what they meant, I still found it very difficult to be myself around my host family. I was worried about their job and life style, so I couldn't do enough of that. Most Japanese people tend to be considerate of others and their situation. I knew how tired my host parents were. By contrast, Canadian people don't have this tendency, and I realized some basic personality or maybe cultural differences between me as a Japanese and them as Canadians.

Nowadays, on the Internet or through social media, we can learn a lot about other parts of the world. But there are still some things we can learn only by being "there". In this Canada study tour, I was able to be exposed to authentic English. Moreover, I could feel and see different aspects of culture and communication. It was also a good experience for me to stay with a Canadian host family and study with students who are from different countries. Thanks to a lot of support, I could have a good time. I can never express my thanks enough for what people who I met in Canada have done for me. This experience will be a good memory and make me stronger from now on. I want to visit Canada again!



高知大学人文社会科学部 人文社会科学科国際社会コース
「2016年度 国際社会実習報告書」

2017年7月 発行

編集・発行 高知大学人文社会科学部
人文社会科学科国際社会コース
〒780-8520 高知市曙町 2-5-1
TEL 088-844-8425
FAX 088-844-8249
<http://jinbun.cc.kochi-u.ac.jp/kokusai/>
印刷・製本 株式会社リーブル
〒780-8040 高知市神田 2126-1
TEL 088-837-1250
FAX 088-837-1251